

相 国 寺 旧 境 内

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報

二〇〇四

一四

相国寺旧境内

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人

京都市埋蔵文化財研究所

相 国 寺 旧 境 内

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび美術館増設に伴う相国寺旧境内の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

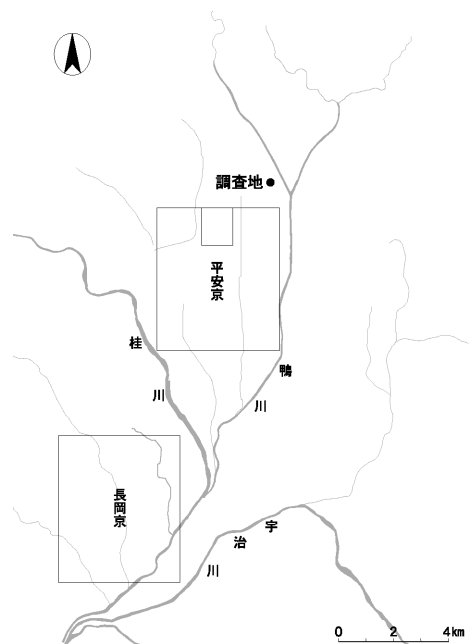
平成17年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 相国寺旧境内
- 2 調査所在地 京都市上京区今出川通烏丸東入相国寺門前町701
- 3 委 託 者 宗教法人 相国寺 代表役員 有馬頼底
- 4 調査期間 2004年6月21日～2004年11月30日
- 5 調査面積 約1,100m²
- 6 調査担当者 東 洋一・能芝妙子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「相国寺」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺 構 番 号 各トレンチ毎に通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。ただし、土塁・建物基壇・掘込み地業・掘立柱建物・柵列については遺構別番号を付した。
- 13 遺 物 番 号 挿図の順に通し番号を付した。
- 14 掲 載 写 真 村井伸也・幸明綾子
- 15 遺 物 復 元 村上 勉・出水みゆき
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 本書作成 東 洋一・能芝妙子
- 18 編集・調整 児玉光世・近藤章子
- 19 鉄滓の科学分析および付章の執筆は村上 隆氏（奈良文化財研究所）に、ガラスの化学分析は北野信彦氏（くらしき作陽大学）にお願いした。
- 20 調査時に、萩本 勝氏（平安高校）、田辺昭三氏、井上満郎氏（京都産業大学）、尼崎博正氏・仲 隆裕氏（京都造形芸術大学）、小栗栖元徳氏（御霊神社宮司）から多くのご教示を受けた。記して謝意を申し上げる。



（調査地点図）

目 次

1 . 調査経過	1
2 . 位置と環境	4
(1) 位置と環境	4
(2) 周辺の調査	5
3 . 遺 構	6
(1) 層 序	6
(2) 遺構の概要	6
(3) 1トレンチ	7
(4) 2・3トレンチ第1面	9
(5) 2・3トレンチ第2面	17
(6) 2・3トレンチ第3面	19
4 . 遺 物	28
(1) 土器類	28
(2) 瓦埴類	34
(3) 製鉄関連遺物	37
(4) 石製品	39
(5) その他の遺物	39
5 . ま と め	40
6 . 付章 鉄滓の化学分析について	42

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	1トレンチ 第1面全景(北から)
		2	1トレンチ 第2面全景(北から)
図版 2	遺構	1	2トレンチ北区 第1面全景(北東から)
		2	2トレンチ南区 第1面全景(東から)
		3	2トレンチ南区 第1b面全景(東から)
図版 3	遺構	1	3トレンチ 第1面全景(南東から)
		2	2トレンチ南区 瓦積暗渠49(南東から)
		3	3トレンチ 石組溝1(北から)

- 図版4 遺構 1 3トレンチ 建物基壇1(南東から)
 2 2トレンチ北区 第2面全景(北東から)
- 図版5 遺構 1 2トレンチ南区 第2面全景(東から)
 2 3トレンチ 第2面全景(北から)
- 図版6 遺構 1 2トレンチ北区 第3面全景(北東から)
 2 2トレンチ南区 第3面全景(東から)
- 図版7 遺構 1 3トレンチ 第3面全景(北から)
 2 3トレンチ 掘立柱建物2(東から)
- 図版8 遺構 1 3トレンチ 土壇280(北から)
 2 3トレンチ 竪穴189遺物出土状況(北東から)
 3 3トレンチ 竪穴215・216・218・302(北西から)
- 図版9 遺構 1 3トレンチ 竪穴196(北西から)
 2 3トレンチ 竪穴196内竈(東から)
- 図版10 遺物 竪穴住居群出土土器
- 図版11 遺物 竪穴住居群・掘立柱建物2出土土器
- 図版12 遺物 丸瓦・平瓦
- 図版13 遺物 製鉄関連遺物

挿 図 目 次

図1	調査地位置図(1:5,000)	1
図2	「寛政二年塔頭敷地図」と調査推定地	2
図3	今回の調査区および既存調査と現地地形図(1:800)	3
図4	調査前風景	4
図5	作業風景	4
図6	賀茂川扇状地ピークと調査地	5
図7	2トレンチ南区南壁断面図(1:50)	6
図8	1トレンチ遺構平面図・布掘柵列18断面図(1:200)	8
図9	1トレンチ東壁断面図(1:100)	8
図10	1トレンチ第2面 瓦拵15実測図(1:40)	9
図11	2トレンチ南区第1面 瓦拵43実測図(1:20)	9
図12	2・3トレンチ第1面遺構平面図(1:300)	10
図13	2トレンチ南区第1b面遺構平面図(1:300)	11
図14	2トレンチ南区第1b面 瓦積暗渠49実測図(1:50)	11

図15	3トレンチ中央セクション・西壁断面図(1:100)	12
図16	3トレンチ第1面 石組溝1・土塁1実測図(1:100)	14
図17	3トレンチ第1面 建物基壇1実測図(1:100)	15
図18	2・3トレンチ第2面遺構平面図(1:300)	16
図19	2トレンチ北区第2面 掘込地業1断面図(1:60)	17
図20	2トレンチ北区第2面 溝95断面図(1:40)	17
図21	3トレンチ第2面 掘立柱建物1・柵列1実測図(1:80)	18
図22	2・3トレンチ第3面遺構平面図(1:300)	20
図23	3トレンチ第3面 掘立柱建物2、柵列2・3実測図(1:80)	21
図24	竪穴住居(竪穴144・123・277・180・189・300)実測図(1:100)	23
図25	竪穴住居(竪穴216・218・302・215・196・82)実測図(1:100)	24
図26	竪穴住居(竪穴105・85・87・78・107・98・96)実測図(1:100)	25
図27	竪穴住居内竈(竪穴123・189・216・218・302・196・85)実測図(1:40)	26
図28	竪穴住居内竈(竪穴98・78)実測図(1:40)	27
図29	3トレンチ第3面 土壌280実測図(1:20)	27
図30	縄文土器・弥生土器・笹文字須恵器実測図(1:4)	28
図31	竪穴住居群・掘立柱建物2出土土器実測図(1:4)	29
図32	平安時代・中世・江戸時代初期の土器実測図(1:4)	33
図33	建物基壇1出土土製品実測図(1:2)	34
図34	相国寺創建以前の瓦拓影・実測図(1:4)	35
図35	相国寺創建以降の瓦・埴拓影・実測図(1:4)	36
図36	竪穴住居群・土壌280出土製鉄関連遺物・石製品実測図(1:4)	38
図37	竪穴196出土砥石	39
図38	鉛ガラス数珠実測図(1:1)	39
図39	鍛造剥片と粒状滓	40
図40	鍛造剥片と粒状滓	40
図41	竪穴85床面出土鉄滓	42

表 目 次

表1	遺構概要表	7
表2	竪穴住居一覧表	22
表3	遺物概要表	28
表4	竪穴住居・掘立柱建物出土土器類観察表	30

相国寺旧境内

1. 調査経過

相国寺境内北東に位置する承天閣美術館が増築されることになり、工事に先立って発掘調査を実施した。

相国寺は永徳二年（1382）将軍足利義満によって発願され、室町幕府の所在地であった室町殿の東側、後小松天皇の土御門東洞院御所北側の広大な寺域に、10年の歳月を費やし、明德三年（1392）に盛大な落慶供養が営まれた五山第二位の大寺院で、幕府官寺として権力の一翼を担っていた。造営に際しては「近辺貴賤遷居於他所、如此事、福原遷都之外無例云々」（『荒歴』永徳二年十月三十日条）といわれ、市街地を移転させて寺域の確保がなされ、建材の確保に関しては「ミヤコニハ、ヒノホスギノ木ツキハテテ、ナゲキテツクル相国寺カナ」（『玉塵』）と巷で歌われるほどであった。しかし創建以来6度に及ぶ焼亡と再建を繰り返し、境内の伽藍配置・塔頭地割り of 全容が諸記録から判明するのは、天明八年（1788）京中大火後に作成された相国寺蔵『寛政

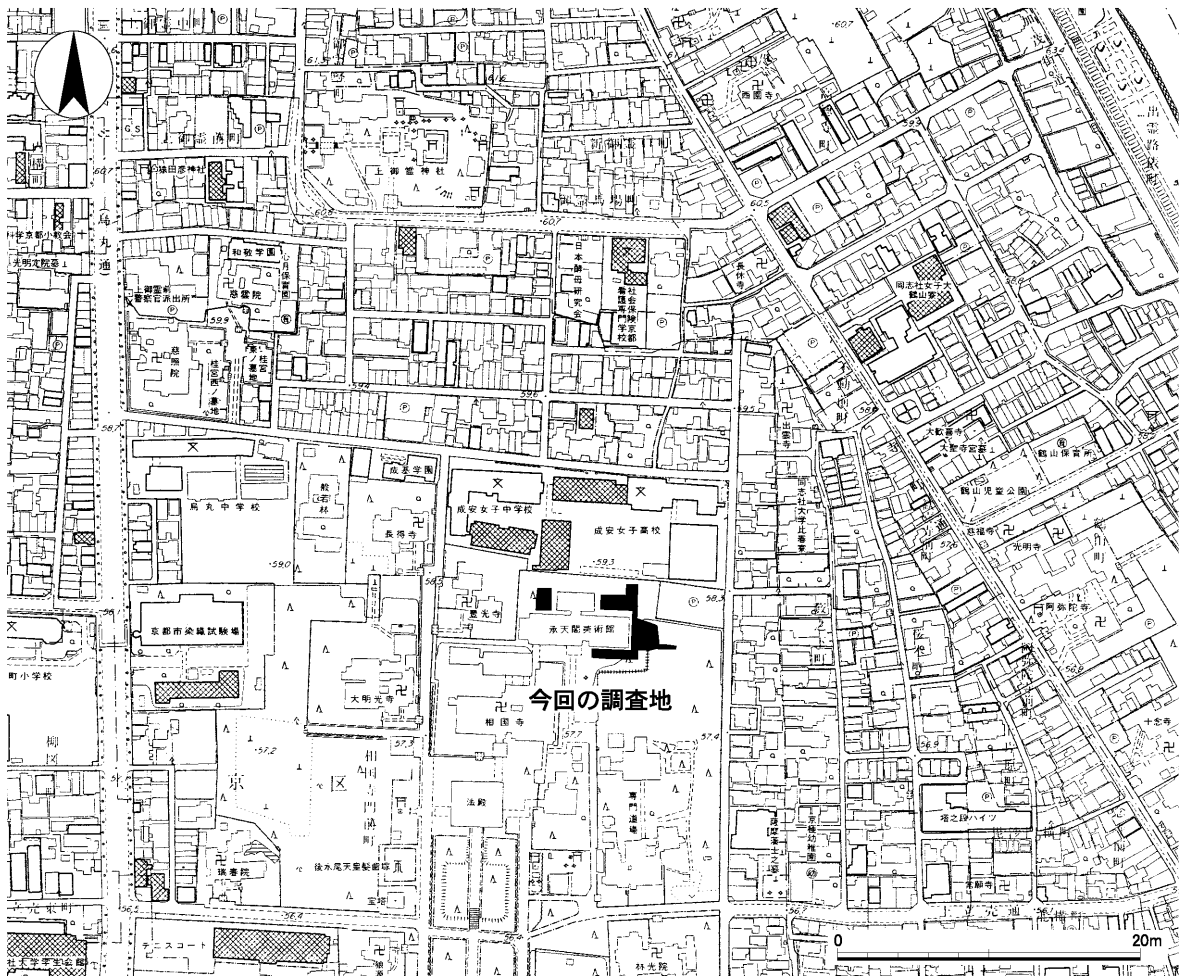
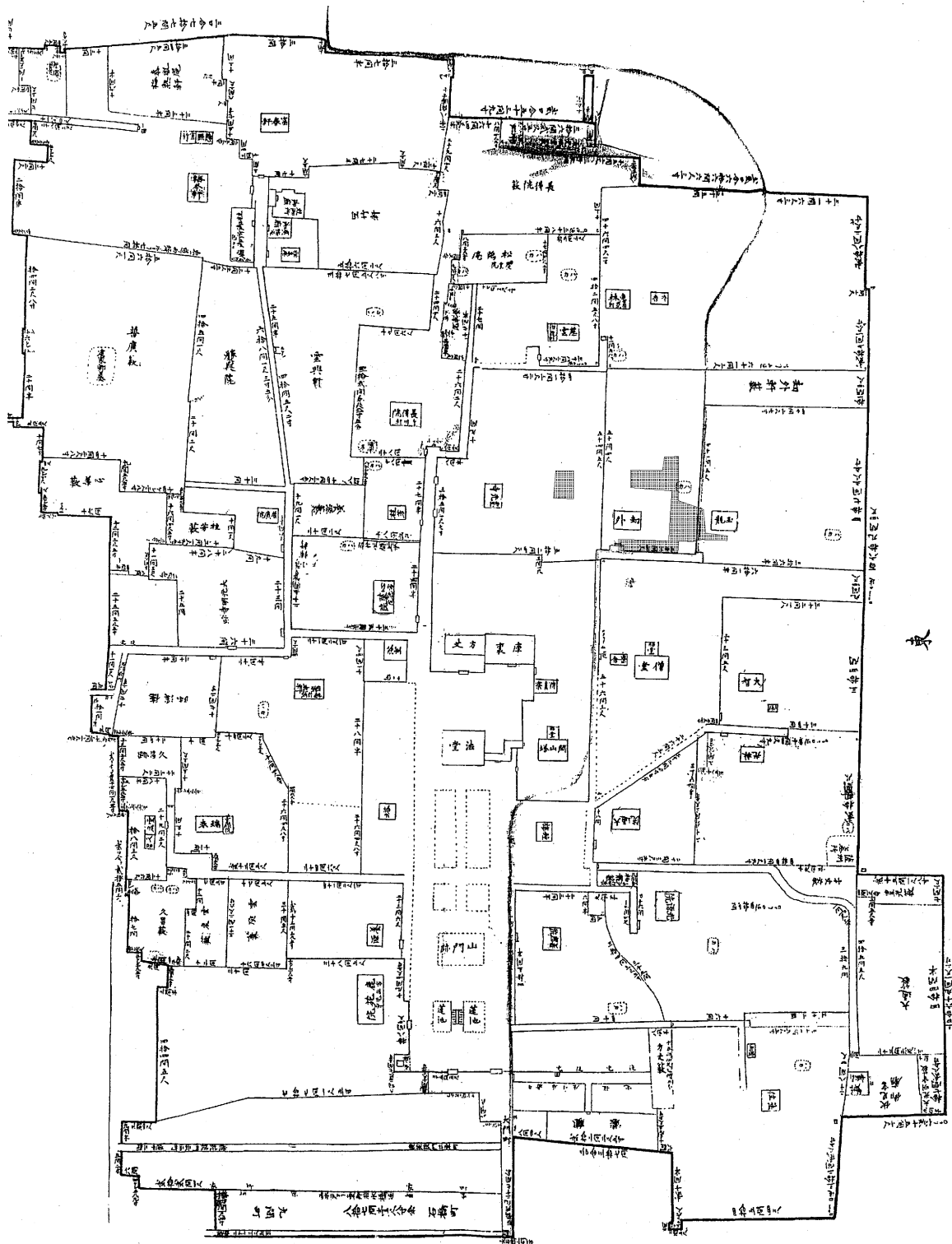


図1 調査地位置図（1：5,000）



調査推定地

図2 「寛政二年塔頭敷地図」と調査推定地（相国寺提供）

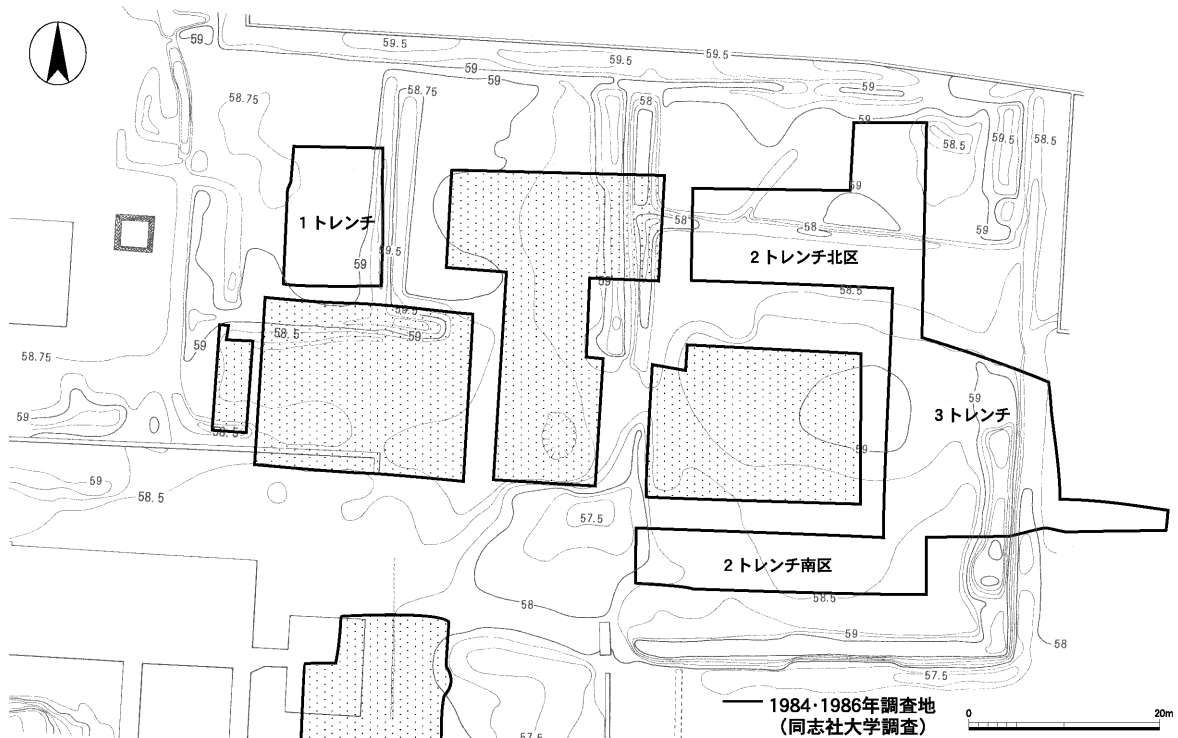


図3 今回の調査区および既存調査と現地地形図(1:800)
(同志社大学校地学術調査委員会「大本山 相国寺境内の発掘調査」第39図を改変)

二年戌九月塔頭敷地地図』(1790)(図2)が初見である。その地図によれば調査対象地の大半が天正年間(1573~1592)に中華承舜を開山とし、明治六年に廃絶した相国寺塔頭・劫外軒の敷地内に含まれる。劫外軒は慶長二十年(1615)『相国寺常寺并諸塔頭知行之目録』に「劫外軒 三十六石四斗三合七夕五才」とあり、相国寺本坊「千四百六十貳石壺斗五合」から配当されていたことが判明している。また調査地西部は相国寺中興の祖、西笑承兌によって慶長三年(1598)豊臣秀吉追善のため創建された豊光寺旧敷地の東側に該当する。豊光寺は元和六年(1620)の大火で焼失し、また天明の大火で豊光寺と劫外軒が焼失した記録が見られる¹⁾。

また相国寺境内は正倉院紙背文書として残された神龜三年(726)『山背国愛宕郡出雲郷雲上里・雲下里計帳』が対象とした出雲郷郷域である可能性が高いため、古代出雲郷関連の遺構の検出が期待された。

承天閣美術館既存本体部分は、同志社大学校地学術調査委員会によって発掘調査が実施され、報告書が刊行されている²⁾。したがって今回の調査は、隣接する美術館本体の発掘調査を踏まえて実施した。また近隣の調査では7世紀から8世紀代の遺物も出土しているので、古代・中世・近世3面の調査計画を立てた。

まず、美術館周辺には樹齢20年以上の檜が密に植林されていたため、その伐採と根起こしより開始した。調査トレンチは美術館本体の周囲に、当初4ヶ所のトレンチを個別に設定し、順次調査を終了していく予定であった。しかし劫外軒の敷地内遺構が連続するため、美術館北西に設置した旧豊光寺敷地内となる1トレンチを除いて、最終的には美術館北東に位置する2トレンチ北区、美術館南西に位置する2トレンチ南区、美術館東に位置する3トレンチの各トレンチは連続



図4 調査前風景



図5 作業風景

するトレンチとなった(図3)。

調査の結果、3トレンチで天明の大火で焼亡した劫外軒建物基壇、賀茂川から御所に給水していた禁裏御用水などを良好な状態で検出したため、10月21日広報発表を行った。10月24日に現地説明会を開催し、約200名の参加があった。

また美術館を取り巻く2トレンチ北区・2トレンチ南区・3トレンチ最終面で、7世紀半ばから7世紀末までの20棟の竪穴住居と、8世紀初頭と考えられる掘立柱建物1棟などを検出した。このため急遽11月26日に再度、広報発表を行った。11月28日に2回目の現地説明会を開催し、約350名の参加があった。

11月30日、プレハブ撤去も含めすべての現場調査を終了した。

調査については相国寺、承天閣美術館に多大な御協力を得た。ここで謝意を示すとともに御礼を申し上げる。

註

- 1) 『相国寺史料 第一巻～第十巻』 思文閣出版 1984～1997年
- 2) 『大本山相国寺境内の発掘調査・承天閣地点の埋蔵文化財』 大本山相国寺承天閣美術館 1984年

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

調査地は標高59mで、賀茂川に沿って発達した扇状地の高まりに位置する。賀茂川に沿ったこの高まりは「賀茂川扇状地ピーク」であり、3万5千年前には形成されていたとされる¹⁾(図6)。調査地北西200m・標高61mに位置する上御霊神社境内は、出雲氏の氏寺と考えられている「出雲寺跡」として遺跡に指定されており、また北約1000m・標高67mに位置する「上総町遺跡」では、7～8世紀代の竪穴住居・掘立柱建物・溝などを検出している²⁾ので、賀茂川南側に形成された「賀茂川扇状地ピーク」に沿って遺跡が点在している可能性がある。上御霊神社以北近辺の高

まりは、市街化されるまでは畑が多く、条里施行跡を窺うことが困難な地域でもある。調査地は高野川と賀茂川合流点の西側に位置していることから、平安京遷都以前から交通の要衝であったと想定できる。

(2) 周辺の調査

近隣の調査では、平安時代から近世までの様々な多くの遺構・遺物が検出されている。平安京遷都以前の遺物は、本調査地北に隣接する京都成安高等学校校地内³⁾から細石核・弥生土器・須恵器などが、承天閣美術館本体調査では弥生土器・須恵器などが単独で出土しており、この地に人が住みだしたの

は平安遷都以前に遡ることが判明している。⁴⁾「相国寺旧境内および同志社キャンパス出土の須恵器」によれば7世紀代から8世紀初頭にかけての須恵器が近辺の調査で広範に出土しており、「出雲郷」郷域の成立が当該時期にあったとされている。しかし既調査から出土した須恵器はすべて遺構に伴うものではないため、それらの実態は不明なままであった。また緑釉陶器が広範に出土していることは、平安京遷都後まもなく平安京域以北に貴族層の開発が及んできたことを物語っているが、遺構に伴うものではない。中世以降の遺構・遺物は多量に検出されているが、遺構では溝・井戸・土壇・石組遺構などが主で、明確な建物跡は検出されていない。

註

- 1) 横山卓雄『平安遷都と鴨川つけかえ』法政出版 1988年 p137
- 2) 大谷大学『大谷大学構内遺跡発掘調査報告』1986年
- 3) 成安女子短期大学校地学術調査委員会『相国寺旧寺域内の発掘調査・成安女子学園校地内の埋蔵文化財』1977年
- 4) 「相国寺旧境内および同志社キャンパス出土の須恵器」『大本山相国寺境内の発掘調査』同志社大学校地学術調査委員会 1988年

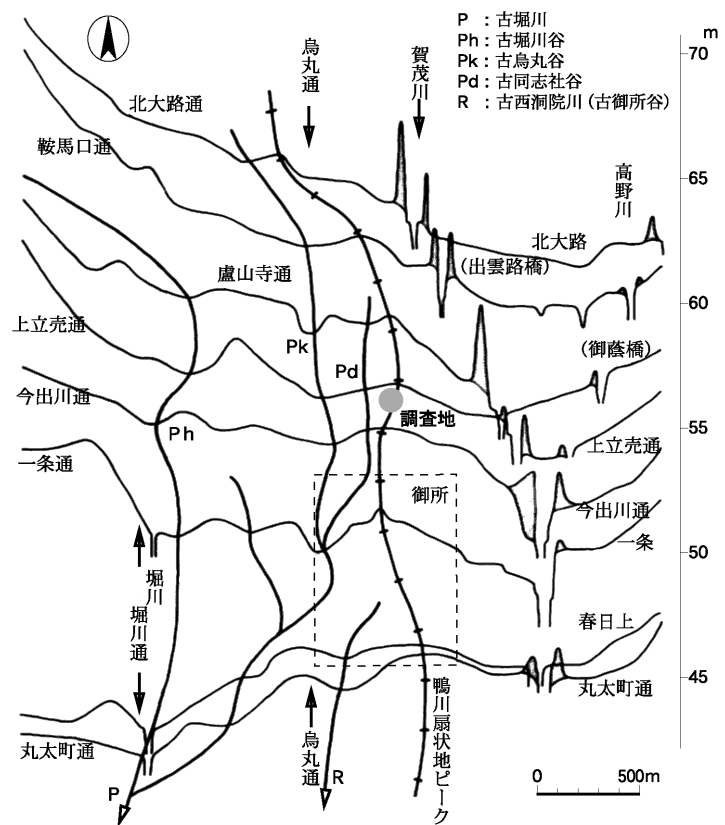


図6 賀茂川扇状地ピークと調査地
(横山卓雄「平安遷都と鴨川つけかえ」P.137の図を改変)

3. 遺 構

(1) 層 序 (図7)

調査が広範囲にわたるため基本層序はトレンチごとで異なるが、天明の大火層が認められた2トレンチ南区の南壁断面が最も本調査の基本層序を反映していると考えられるので、ここで示す。

第1層は明治時代の塔頭廃絶後に堆積した腐植土層である。この層は他のすべてのトレンチでも確認できる。第2層は天明の大火後の整地土で、第3層が天明の大火層である。この焼土層は2トレンチ南区の中央部に厚く堆積しており、また3トレンチで検出した基壇上に被さっていた。しかし基壇以北および1トレンチ・2トレンチ北区では焼土層を検出していない。第4層は近世初頭の整地土で、この層上面を第1面とした。第5層は中世の整地土である。2トレンチ南区では、この層を切って近世初頭の暗渠などの遺構を検出したので、この層上面を第1b面として掲載した。第6層は黒褐色砂泥で、緑釉陶器を含む平安時代の包含層である。この層は2トレンチ南区だけに存在する。この層の上面で平安時代末期から中世にかけての遺構を検出したので、この面を第2面とした。第6層下は地山となり、最終調査面の第3面である。地山層は鴨川扇状地を形成している径5～10cmほどの玉石が主な砂礫地帯と、シルト地帯から構成されていた。

1トレンチと2トレンチ北区は、基本層序の近世整地土上面を第1面とし、この整地土下面が直接地山層で第2面が最終調査面となる。2トレンチ北区・3トレンチは平安時代の層が存在せず、中世の整地層下が最終調査面の第3面で地山層となる。

(2) 遺構の概要

第1面調査は、現状地形が溝や土塁などの旧地形を多く留めており、劫外軒敷地内となる3トレンチの微高地状の高まりから基壇を、南北方向の高まりから土塁を、土塁東側の溝状の凹みから水路跡(御用水)を検出した。また1トレンチ東側の南北方向の土塁下から石列を検出し、築地基礎と判断した(図3地形図参照)。ただし、今回の調査では天明の大火以降の瓦溜・塵穴はす

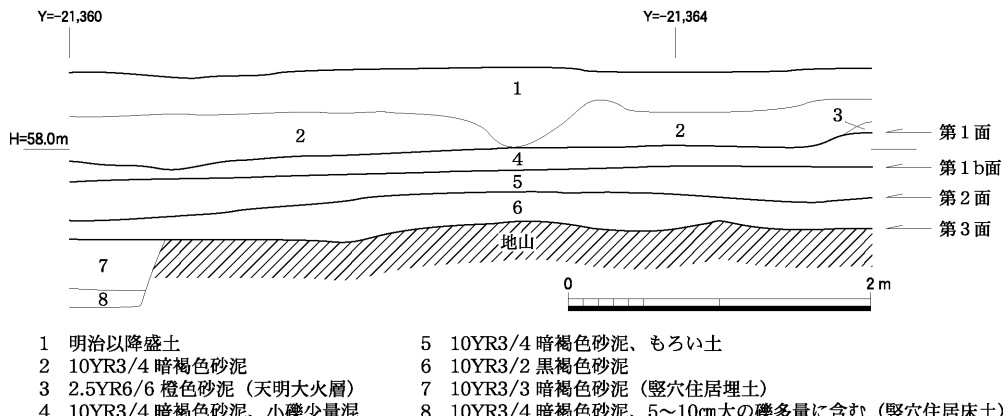


図7 2トレンチ南区南壁断面図(1:50)

べて攪乱としたため、近代・近世の攪乱が多く、とりわけ1トレンチ・2トレンチ南区で顕著であった。

第2面は、近世の整地土・地業を取り除いた中世の面である。しかし、1トレンチ・2トレンチ北区では直接地山面となり、1トレンチと同じく地山面に成立する複数期の遺構検出となった。

第3面は、地山面での検出となり、竪穴住居群をシルト地帯上面から検出した。広がりを確認するために3トレンチ東部・御用水の東側に幅3m、長さ10mの東方向のサブトレンチを入れ、礫層の地山まで確認したが、竪穴住居は検出していない。

(3) 1トレンチ(図8、図版1)

1トレンチは豊光寺旧敷地内となり、また第2面では近世から中世の遺構を重複して検出した地山面となるので、1トレンチに限り第1面に続けて第2面を先に説明する。

1トレンチ第1面

1トレンチは現状では豊光寺東側に位置しているが、かつては豊光寺敷地内であった。豊光寺正門が西側に開いており、したがって調査地は豊光寺裏手となる。トレンチ北西部に大きな近代の瓦溜があり、南壁に沿って攪乱がある。第1面は面をなさないほどで、遺構密度は少ない。

築地10 近代の盛土を取り除いたところ、トレンチ東壁に沿って残存高0.5mの築地基礎を4mにわたって検出した。築地基礎部分は黄色粘土を10cmの厚さで貼り、西端に25cm大の石を西に面を揃えて並べていた。築地跡は東壁中央で攪乱などにより南半部が消滅していたが、石列に沿って幅1.1m、深さ0.1mの溝2をトレンチ南端の攪乱部分まで検出している。築地がトレンチを超えて南北にわたって築かれていた可能性が高い。またトレンチ外となる土塁東側は現状でも溝状に凹んでいるので、築地と対になる深い溝の可能性もある。この築地跡より9m東に位置する南北方向の土塁と溝跡が豊光寺と劫外軒との旧境であるので、豊光寺内部の区画を示すものであろう。

1トレンチ第2面

第2面からはトレンチを貫く南北方向の布掘柵列18、L字状溝12および途中で止まる東西溝17などを検出した。東西溝17は中世に遡る。

布掘柵列18 トレンチ南北に貫く柵列である。幅0.7m、深さ約0.2mの布掘状の溝で繋がり、

表1 遺構概要表

時 期	遺 構	備 考
飛鳥時代	竪穴住居群、掘立柱建物、柵列	
平安時代	土壇、溝、整地層	
鎌倉時代	溝、柱穴	
室町時代	掘込地業、掘立柱建物、柵列、土壇、柱穴	
桃山時代～江戸時代	建物基壇、瓦積暗渠、瓦拵、築地、布掘柵列、竈、石詰遺構	

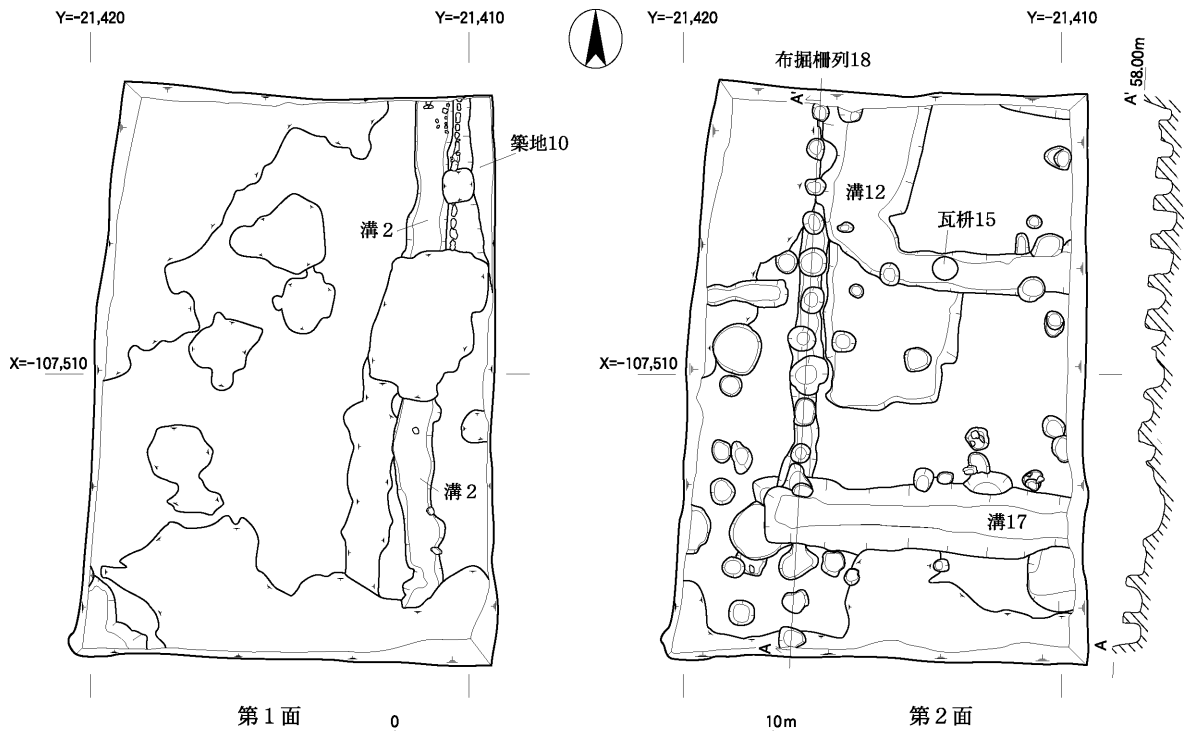


図8 1トレンチ遺構平面図・布掘柵列18断面図(1:200)

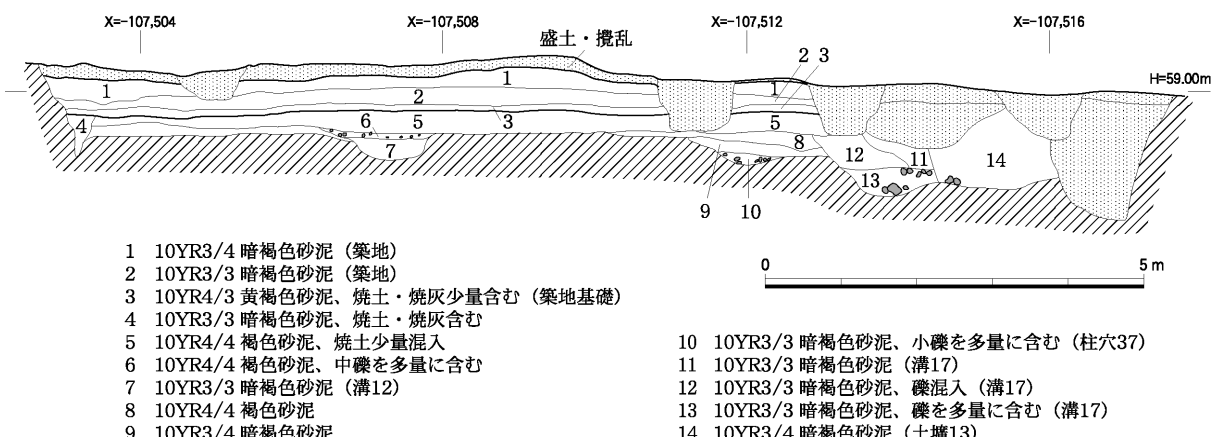


図9 1トレンチ東壁断面図(1:100)

約1mの間隔で穿たれていた。柱穴は布掘下から検出され、板塀であった可能性がある。近世初頭の遺物を検出している。

溝12 溝12はL字状を呈し幅1.0m、深さ0.3mで、トレンチ東壁中央から西に延び、中央でトレンチ北に折れ曲がりトレンチ外に延びる。北に折れ曲がった付近から幅が広がる。

瓦柁15(図10) 溝12の東西方向中央部で、瓦を縦方向に用いて径0.6mの円形に組み、周囲に拳大の石を詰めた瓦柁15を検出した。このため溝12は暗渠であった可能性がある。時代は出土遺物からいずれも近世初頭を遡らない。

溝17 トレンチ南部で検出した東西方向の幅1.2m、深さ0.8mの溝である。トレンチ東端から

西に8.5mまで延びるが途中でとまっている。位置的には、トレンチ東側の承天閣美術館本体調査で検出されている東西溝（SD201）の東延長にあたる。同志社大学調査で14世紀の前半までの資料が出土したとされている¹⁾。今回の調査でも南北朝時代の遺物を検出し、同様の結果を得た。

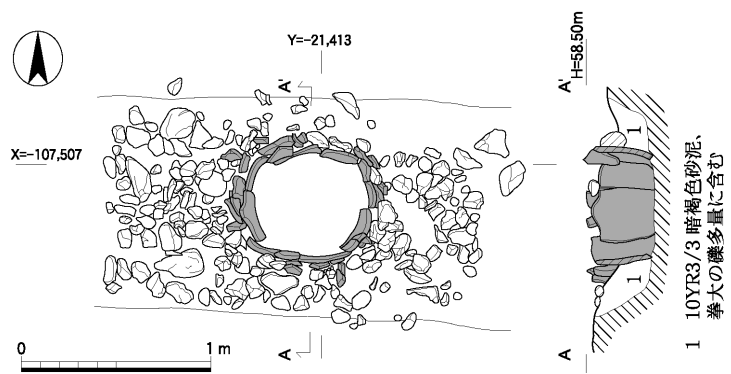


図10 1トレンチ第2面 瓦拵15実測図(1:40)

(4) 2・3トレンチ第1面(図12)

2トレンチ北区第1面(図版2-1)

このトレンチ第1面は焼瓦溜・塵穴を除いて遺構密度が少なく火災層も検出していない。劫外軒北側裏手の状況を示していると思われる。またトレンチ北壁にかかった天明の大火の焼瓦溜から上面を平らにした巨大な花崗岩製の礎石を検出している。なおトレンチ中央を貫く東西溝1は底まで近代の遺物で占められていた。

竈28~32 2トレンチ北区で劫外軒建物に伴う遺構は、トレンチ南東部の東西方向に並んだ竈5基だけである。竈はいずれも焚き口を北に向け、縦1.5m、幅0.7m、深さ0.2m内外である。そのうち2基は攪乱によって本体部分が消失している。粘土で馬蹄形に成形された竈内には直接火を受けた痕跡のある石が焼成部に沿って配置されていた。一部に鑿で加工された10cm四方の角棒状凝灰岩系石材がある。竈内から19世紀以降と推定される丹波産の通徳利破片を検出しているので、竈群は天明の大火以降に建てられた劫外軒庫裏に伴うものであろう。

土壌56 トレンチ南西隅に穿たれた巨大な土壌である。該当地はシルト層なので土取穴であろう。出土遺物から江戸時代前半である。

2トレンチ南区第1面(図版2-2)

『塔頭敷地図』によれば該当地は劫外軒南側敷地内となり、トレンチ西部に劫外軒正門が南に開いていた様子が描かれている。トレンチ中央部に火災層が集中して堆積しており、この火災層分布範囲に建物が存在したものと考えられる。ただし礎石は検出してない。

瓦拵43(図11) 火災層下より小型の平瓦5枚を縦に組み、平瓦1枚で蓋にした拵を検出している。この瓦拵直下に第1b面で検出した中世の整地土を掘り込んで設け

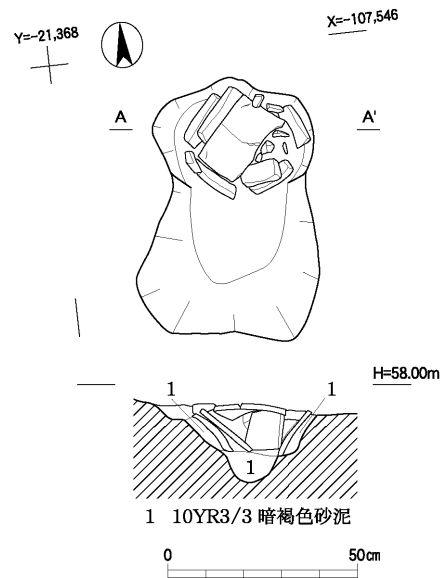


図11 2トレンチ南区第1面 瓦拵43実測図(1:20)

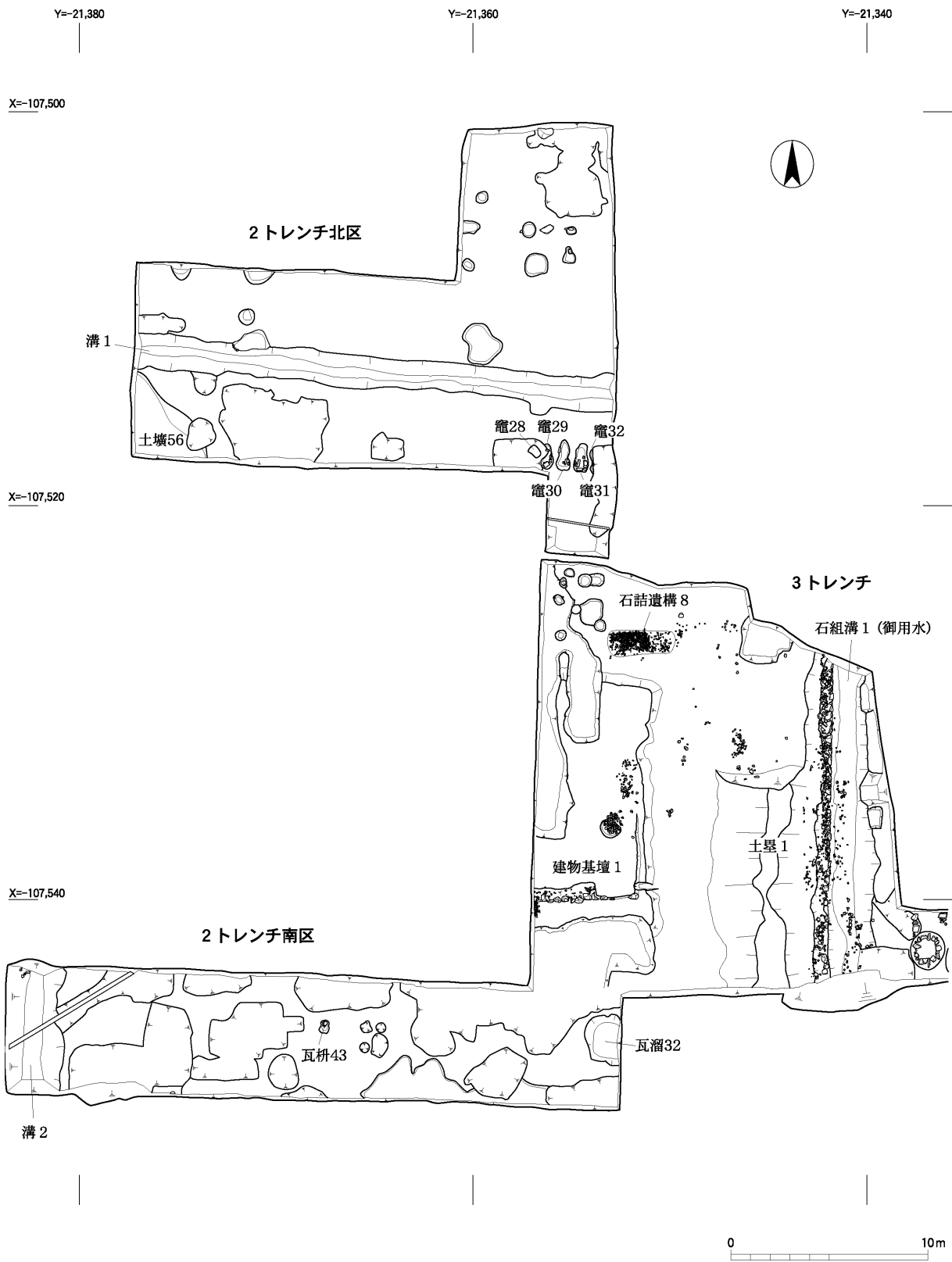


図12 2・3トレンチ第1面遺構平面図(1:300)

られた瓦積暗渠49があり、一連の遺構となる。

瓦溜32 トレンチ東壁にかかって検出した、幅2.5m、深さ0.4mの焼瓦溜遺構である。近世の染付を検出しているが、桃山時代以前と考えられる瓦も多く、第1b面で成立している遺構であった可能性がある。

溝2 トレンチ西端で南北方向の深さ1.5mの溝を検出した。溝西肩はトレンチ外となり幅は不明である。この溝は上記の豊光寺と劫外軒の境界線上に該当し、承天閣美術館本体調査で検出している相国寺創建当時の遺構とされる南北溝（SD001）の南延長線上に位置する。上層は近代の塵捨て場となっており、下層から近世の遺物を検出している。

2 トレンチ南区第1b面（図13、図版2-3）

トレンチ中央部で中世の整地土を掘り込んで作られた瓦積暗渠と焼瓦を詰めた暗渠2条などを検出した。劫外軒の地業に伴う施設と考え、このトレンチに限り第1b面を設定した。

瓦積暗渠49（図14、図版3-2） 第1面で検出した瓦拵43直下で検出した。内法長さ東西4.7m、幅0.4m、深さ0.1mの溝状遺構で、長辺両肩に丸瓦を俯せ玉縁に合わせて直線上に置き、そ

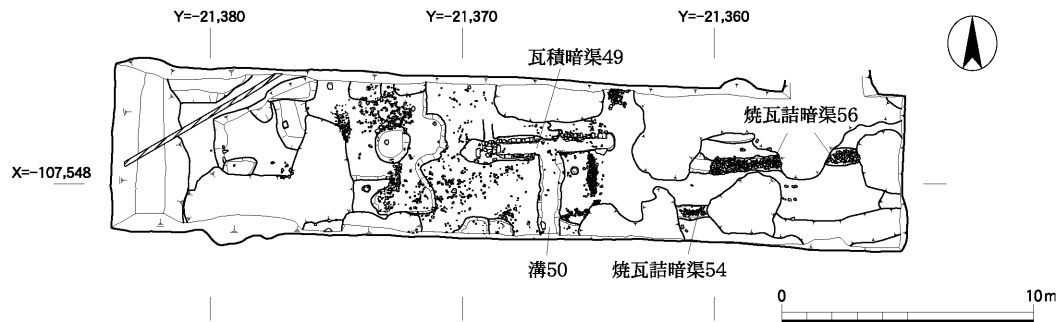


図13 2 トレンチ南区第1b面遺構平面図（1：300）

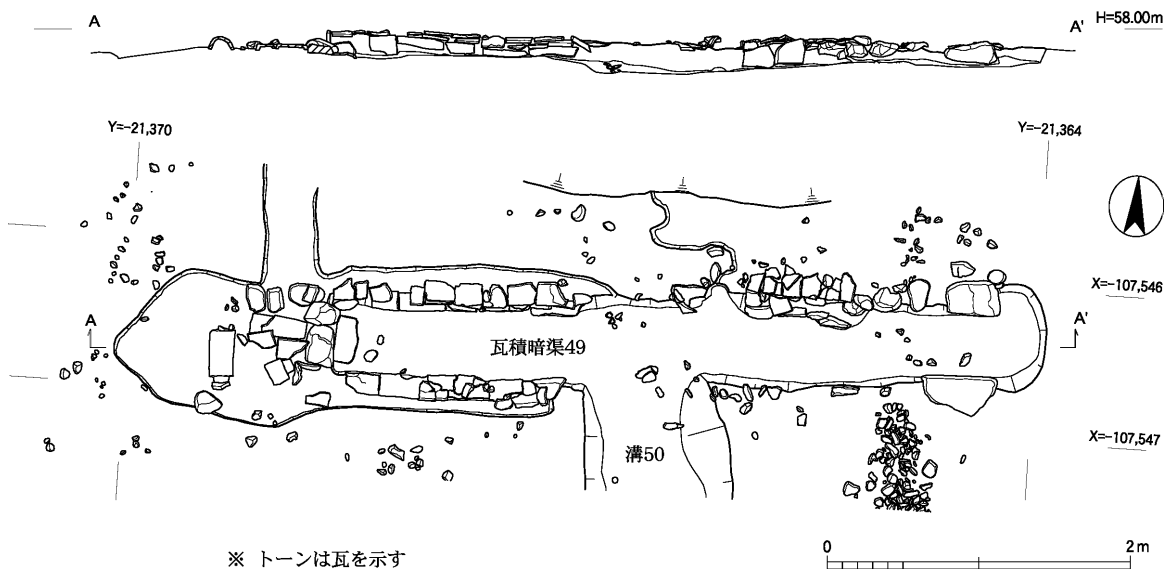
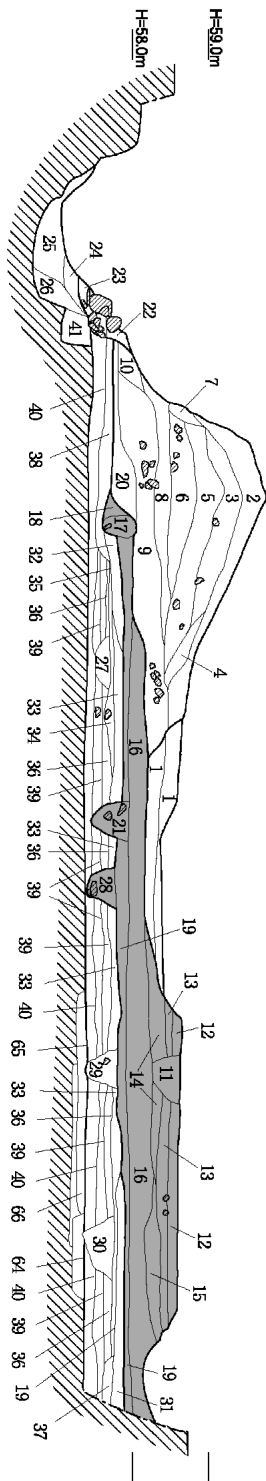


図14 2 トレンチ南区第1b面 瓦積暗渠49実測図（1：50）

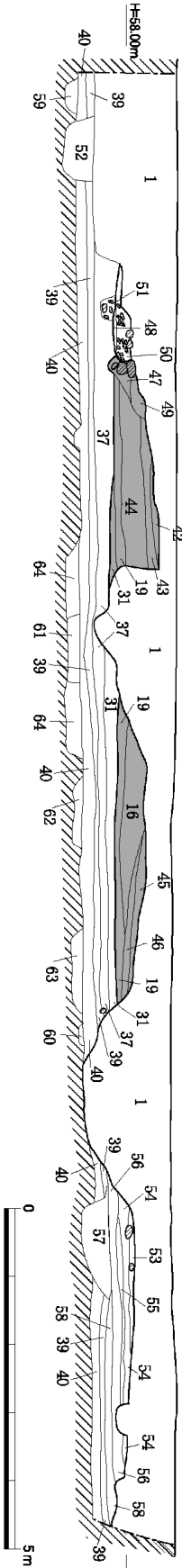
3 トレンチ中央セクション (X=-107.534ライン)

東 Y=-21.340 Y=-21.344 Y=-21.348 Y=-21.352 Y=-21.356 西



3 トレンチ西壁

南 X=-107.544 X=-107.540 X=-107.536 X=-107.532 X=-107.528 X=-107.524 北



- | | | |
|-----------------------------------|-------------------------------------|-----------------------------------|
| 1 攪乱 | 23 2.5YR3/2 黒褐色砂泥 (南北石組溝、下段石組細形) | 45 10YR3/3 暗褐色砂泥 |
| 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、中礫含む | 24 2.5YR4/3 オリーブ褐色シルト | 46 10YR3/4 暗褐色砂泥 |
| 3 10YR3/3 暗褐色砂泥、小〜中礫含む | 25 2.5YR4/1 黄灰色シルト、中礫含む | 47 10YR4/4 褐色砂泥 (基壇南端石組細形) |
| 4 10YR4/4 褐色砂泥 | 26 2.5YR4/4 オリーブ褐色砂泥 | 48 10YR4/6 褐色シルト (雨落ち) |
| 5 10YR3/3 にぶい黄褐色砂泥 | 27 10YR3/2 灰黄褐色粘土質、雑灰・土師片含む (土埋土) | 49 10YR3/4 暗褐色砂泥、小礫含む |
| 6 10YR3/3 暗褐色砂泥、中礫含む | 28 10YR3/3 暗褐色砂泥、雑灰・土師片含む (柱穴埋土、礎石) | 50 10YR3/3 暗褐色砂泥、礫土混じり (瓦溜、天明火災層) |
| 7 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 29 10YR4/4 褐色砂泥、雑灰・土師片含む (柱穴) | 51 10YR3/4 暗褐色砂泥 |
| 8 10YR3/3 暗褐色砂泥、やや粘質 | 30 10YR4/4 褐色砂泥、雑灰含む | 52 10YR3/3 暗褐色砂泥 (土塊) |
| 9 10YR3/4 暗褐色砂泥、中〜大礫含む (土墨最下層) | 31 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 53 炭層 (締造遺構) |
| 10 10YR4/4 褐色砂泥 | 32 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、黄色粘土層 | 54 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、黄色粘土層 |
| 11 10YR3/4 暗褐色砂泥、中〜大礫含む (土塊) | 33 10YR4/4 褐色砂泥 | 55 10YR4/4 褐色砂泥、灰色フロッツ混じり |
| 12 10YR4/4 褐色砂泥、小〜中礫含む | 34 10YR3/4 暗褐色砂泥、雑灰・土師片含む | 56 10YR3/4 暗褐色砂泥 |
| 13 10YR3/4 褐色砂泥 | 35 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 57 10YR3/3 暗褐色砂泥、炭混じり (土塊) |
| 14 10YR3/3 暗褐色砂泥、雑灰・土師片含む | 36 10YR4/4 褐色砂泥 | 58 10YR4/4 褐色砂泥 |
| 15 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 37 10YR3/3 暗褐色砂泥、雑灰・土師片含む | 59 10YR4/3 にぶい赤褐色砂泥 |
| 16 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 38 10YR3/3 暗褐色砂泥、雑灰・土師片含む | 60 10YR3/3 暗褐色砂泥 (柱穴埋土) |
| 17 10YR4/4 褐色砂泥〜泥砂 (基壇東端石組細形、石抜穴) | 39 10YR3/3 暗褐色砂泥、雑灰・土師片含む | 61 10YR3/3 暗褐色砂泥 |
| 18 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (基壇石組粗め土) | 40 10YR4/4 褐色砂泥 | 62 10YR3/4 暗褐色砂泥 |
| 19 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、粘質 (基壇床面) | 41 10YR4/4 暗褐色砂泥 (土埋175埋土) | 63 10YR4/4 褐色砂泥 |
| 20 10YR4/4 褐色砂泥、砂混じり | 42 2.5YR6/6 橙色 (天明火災層) | 64 10YR3/4 暗褐色砂泥、中礫含む (壘穴216) |
| 21 10YR4/4 褐色砂泥 (溝100埋土) | 43 10YR3/4 暗褐色砂泥、小礫含む | 65 10YR3/4 黄褐色砂泥、粘質、礫土含む (壘穴218) |
| 22 10YR4/6 褐色砂泥 (南北石組溝、上段石組細形) | 44 10YR4/4 褐色砂泥、砂・小〜中礫を多く含む | 66 10YR3/4 暗褐色砂泥 (壘穴302) |

図15 3 トレンチ中央セクション・西壁断面図 (1:100)

の上に平瓦破片を乗せて肩部としている。肩部東端に花崗岩製の切石を2個配し、西端部は自然石で塞いでいる。溝内の一部に焼土が落ち込んでいた。瓦柝と対になる遺構と考え、暗渠と判断した。長軸中央より南に幅1mの南北溝50が取り付け、南に流す構造であったと思われる。溝内から近世初頭初期と考えられる土師器皿小片が出土している。なお肩部を形成している瓦の多くは破片であり、火を受けているものも多く転用品である。

焼瓦詰暗渠54・56 トレンチ東部で10cm内外の小片の焼瓦が詰まった2条の東西方向の溝を検出した。焼瓦を小片にして意識的に詰め込んだ湿気抜き溝の可能性はある。

3 トレンチ第1面(図版3-1)

『塔頭敷地図』によれば劫外軒東側に南北方向の「御用水」と称する水路が描かれており、東隣の塔頭・玉龍庵との境界をなしている。この御用水跡は現状の地形でも溝状に凹んでおり、この凹み西側に沿って土塁が地上に盛り上がり残存していた。この痕跡はトレンチ南端から南に17m続き、さらにL字状に西に曲がり、2トレンチ西端で検出した溝2の南8m延長した付近で消滅している。また美術館東側に盛り上がり微高地から建物基壇を検出した。御用水・土塁・基壇の関係は、最終調査面まで記録したトレンチ西壁断面図とX=-107,534ラインに沿って設けた中央セクション断面図を参照されたい(図15)。

石組溝1と土塁1(図16、図版3-3) 上記の現状地形に沿って腐植土層を剥がしたところ、西側を径30~40cmの自然石で護岸した幅2m、深さ1mの石組溝1を15m分検出した。この水路跡は相国寺の南に位置する御所に給水していた御用水跡である。また水路西側に沿った高さ1.6m、基底部幅6mの土塁1を検出した。土塁はトレンチ北半がすでに破壊されていた。

御用水跡に溜まった近代のガラス・瓦・コンクリートなどの廃材を取り除き、5cmほど砂層を掘り下げたところ、江戸時代初期の完形の土師器皿や焼塩壺を多数検出した。御用水は明治四十五年(1912)に御所水道が完成するまで機能していたと考えられ、廃絶後は芥溜場になって埋まっていた状況を示していた。

また西側の土塁と石組を外したところ、溝西肩が西に0.5m広がり、江戸時代初期の遺物検出地点から40cm下の標高56.55mで溝底の地山砂礫層に達し、溝肩から深さ1.5m、幅2.5mのU字型断面の素掘り水路であることが判明した。

土塁1の成立時期は土塁堆積土下より次に述べる劫外軒建物基壇の東側石列を検出しているので、基壇築造期より新しい。土塁の盛土は砂が主体の砂礫でレンズ状に積み上げられており、溝開削時に伴う地山を構成している拳大の玉石は量的に少ない。盛土から江戸時代中期以降の肥前陶磁器などを検出している。土塁断面面積は溝断面面積より2倍以上の面積で、劫外軒建物基壇中央部を挟った土で土塁のベースを築いた可能性が高い。

溝の石組は、土塁の東側に後に補足して構築しているので、土塁より新しい。

建物基壇1(図17、図版4-1) 美術館東の微高地状の高まりから東西16m、南北11.5m、高さ0.7mの建物基壇を検出した。西端は現在美術館となっているので不明である。基壇は南面と東面を径30~40cmの自然石で化粧しており、西壁から南辺東西5m、南東隅から北に東辺4m分検

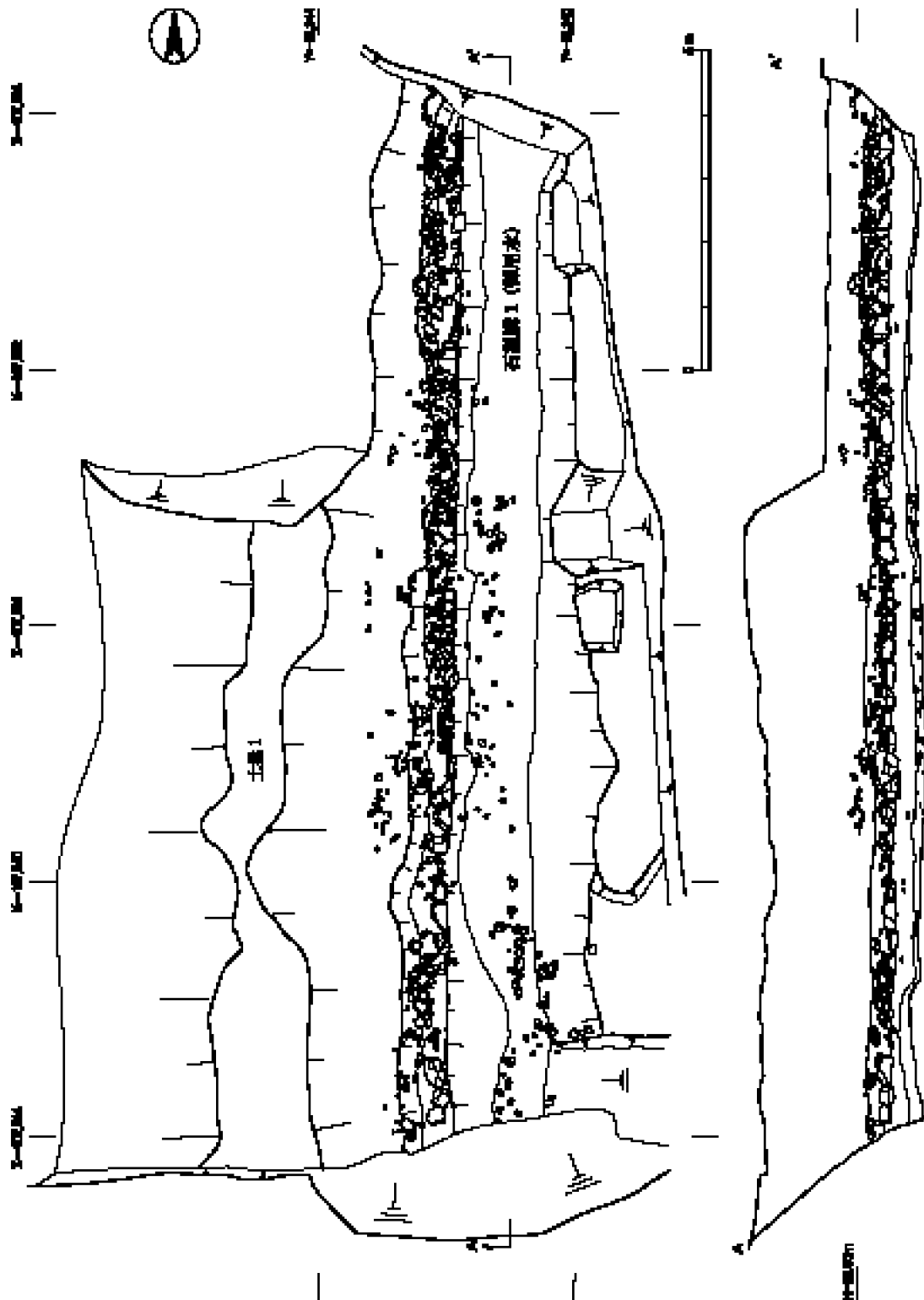


図16 3トレンチ第1面 石組溝1・土塁1実測図(1:100)

出した。基壇東半部は攪乱によって溝状に破壊されており、土塁1の盛土となった可能性が高い。基壇下に成立していた土壇60から15世紀末～16世紀初頭にかけての遺物を検出しているため、基壇築造はこの年代を遡らない。また基壇上面に焼土が、南辺の石組には焼瓦・焼土が密着して堆積していた。この焼瓦・焼土堆積中から江戸時代後半代の遺物を検出したので、天明の大火で焼

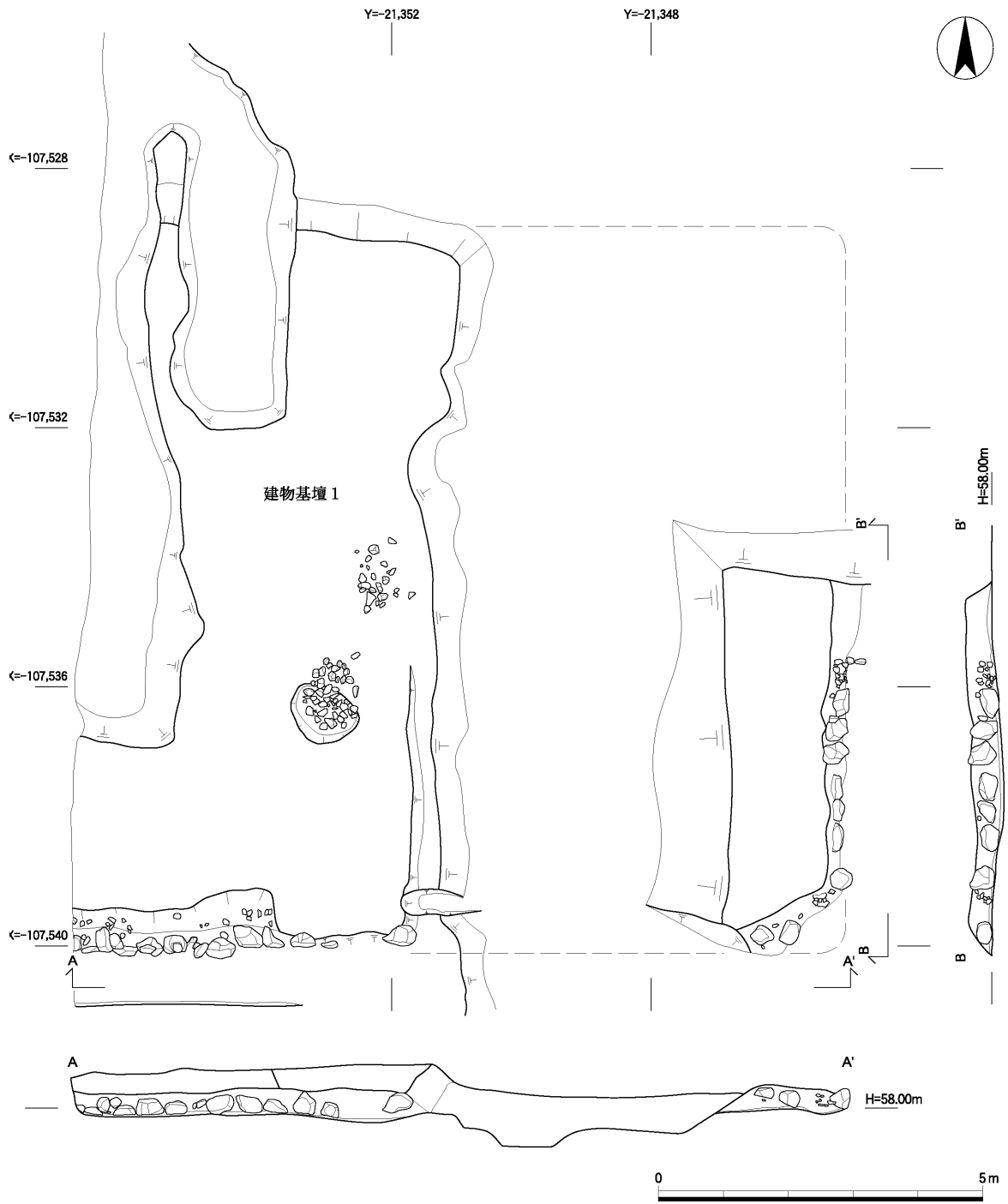


図17 3トレンチ第1面 建物基壇1実測図(1:100)

亡した劫外軒建物跡と判断した。

石詰遺構 8 基壇北側から東西4m、幅1.5m、深さ1mの拳大の川原石を詰めた遺構を検出した。この遺構の周辺には黄色粘土が貼り付いており、その上に炭層が堆積していた。炭層から鉄滓を検出しており、石詰遺構は鑄造に際しての湿気抜き施設の可能性がある。これらの層と基壇との関係は、粘土層・炭層が基壇北辺肩に乗っており基壇よりも新しい。

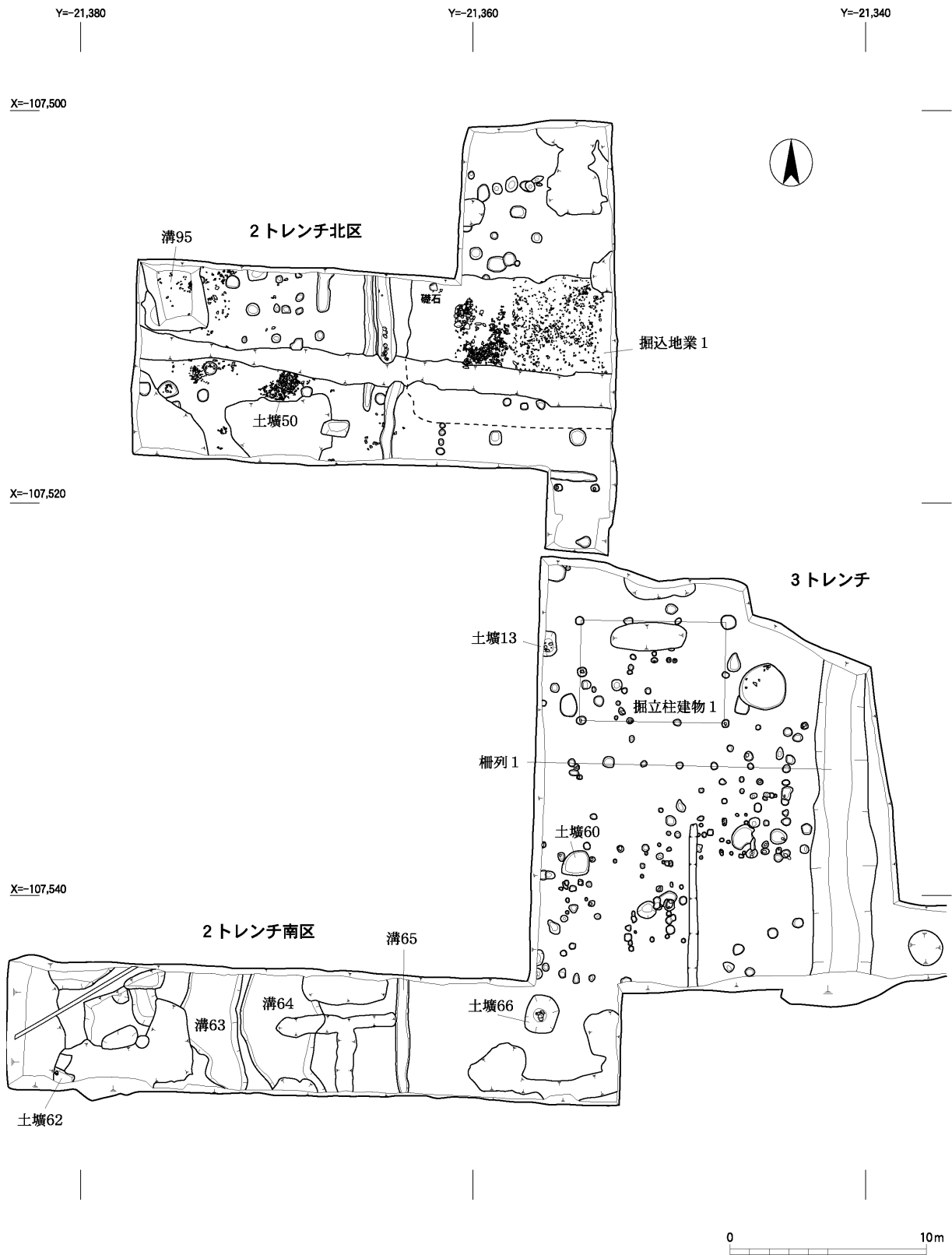


図18 2・3トレンチ第2面遺構平面図(1:300)

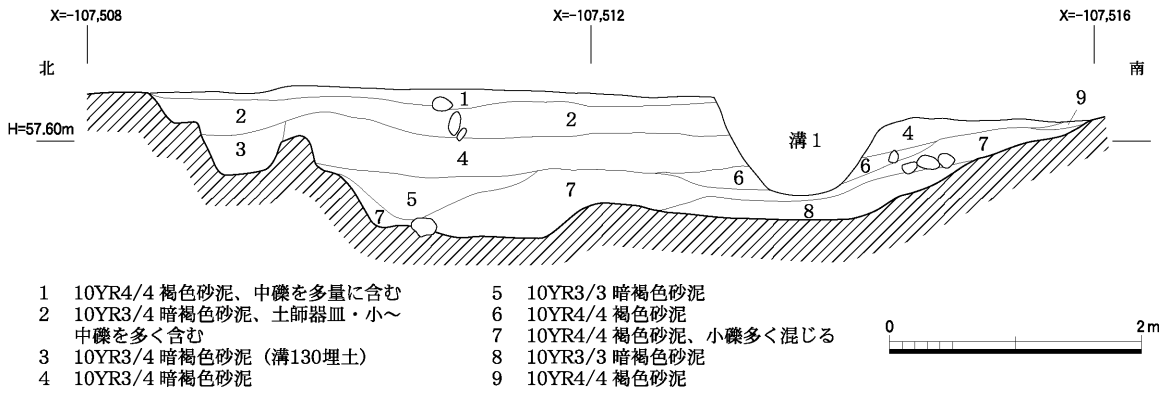


図19 2トレンチ北区第2面 掘込地業1断面図(1:60)

(5) 2・3トレンチ第2面(図18)

2トレンチ北区第2面(図版4-2)

この調査区第2面からは鎌倉時代から室町時代にかけての遺構を検出している。

掘込地業1(図19) 南北7.5m、東西10m、深さ0.5mの長方形の掘込地業で、東端はトレンチ外となる。地業北西隅には30cm大の円形礎石が据えてあり、地業上面に据えてある礎石付近から14世紀後半の土師器皿がまとめて出土している。

土壌50 トレンチ西部で北端と南端を溝1と攪乱に切られている東西幅2m、深さ0.1mの浅い土壌から土師器皿を多量に検出した。土師器皿は室町時代前半である。

溝95(図20) トレンチ北西隅の北壁からやや南東方向に振る、断面が逆台形で幅3m、深さ1.2m、長さ3.5mの溝を検出した。ただし北壁から南3m付近で止まっている。堆積土下層から数点の鎌倉時代前期の完形の土師器皿が出土した。

2トレンチ南区第2面(図版5-1)

第2面は攪乱が多いため、3トレンチに比べて遺構数が極端に少ない。トレンチ中央部で3条の南北方向の溝などを検出している。

土壌66 径1.2m、深さ0.6mの円形土壌で、底に凝灰岩の破片が詰まっていた。15世紀後半の遺物が中心である。

溝64 トレンチ中央部でトレンチを貫く南北方向の溝で幅4m、深さ約0.5mを測る。平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての土師器皿を検出している。

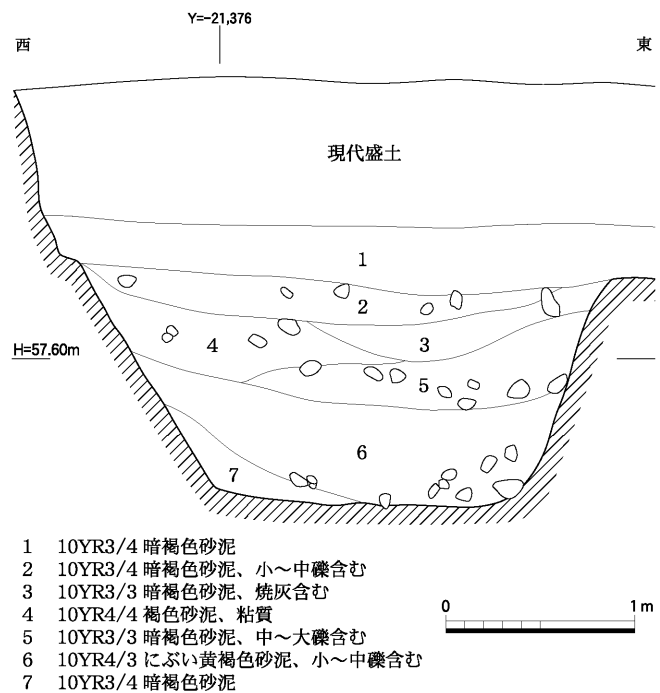


図20 2トレンチ北区第2面 溝95断面図(1:40)

溝63 溝64の西に平行する同時期の幅3m、深さ0.2mのやや不定形な溝である。溝64に比べ遺物は少ない。

溝65 溝64の東に平行する同時期と考えられる幅0.5m、深さ0.1mの細い溝である。

3 トレンチ第2面 (図版5-2)

このトレンチには厚さ40cmほどの中世の整地土が堆積しているが、調査期間の関係上、重機で最下層まで掘り下げてから中世の遺構の検出に努めた。その結果、中世の0.3m内外の円形柱穴を多数検出することができた。

掘立柱建物1・柵列1(図21)建物として復元できたのはトレンチ北半部に位置する東西方向、8尺等間の2間×3間の掘立柱建物1と、建物1南から2.1m(7尺)地点に位置する東西柵列1のみである。掘立柱建物1の柱穴には15cm内外の扁平な根石が据えられたものや根石跡が残る。東西柵列1は掘立柱建物1に平行しており6尺等間でトレンチ西壁外に延びる可能性がある。これらの柱穴から赤色系・白色系土師器皿の細片を検出している。

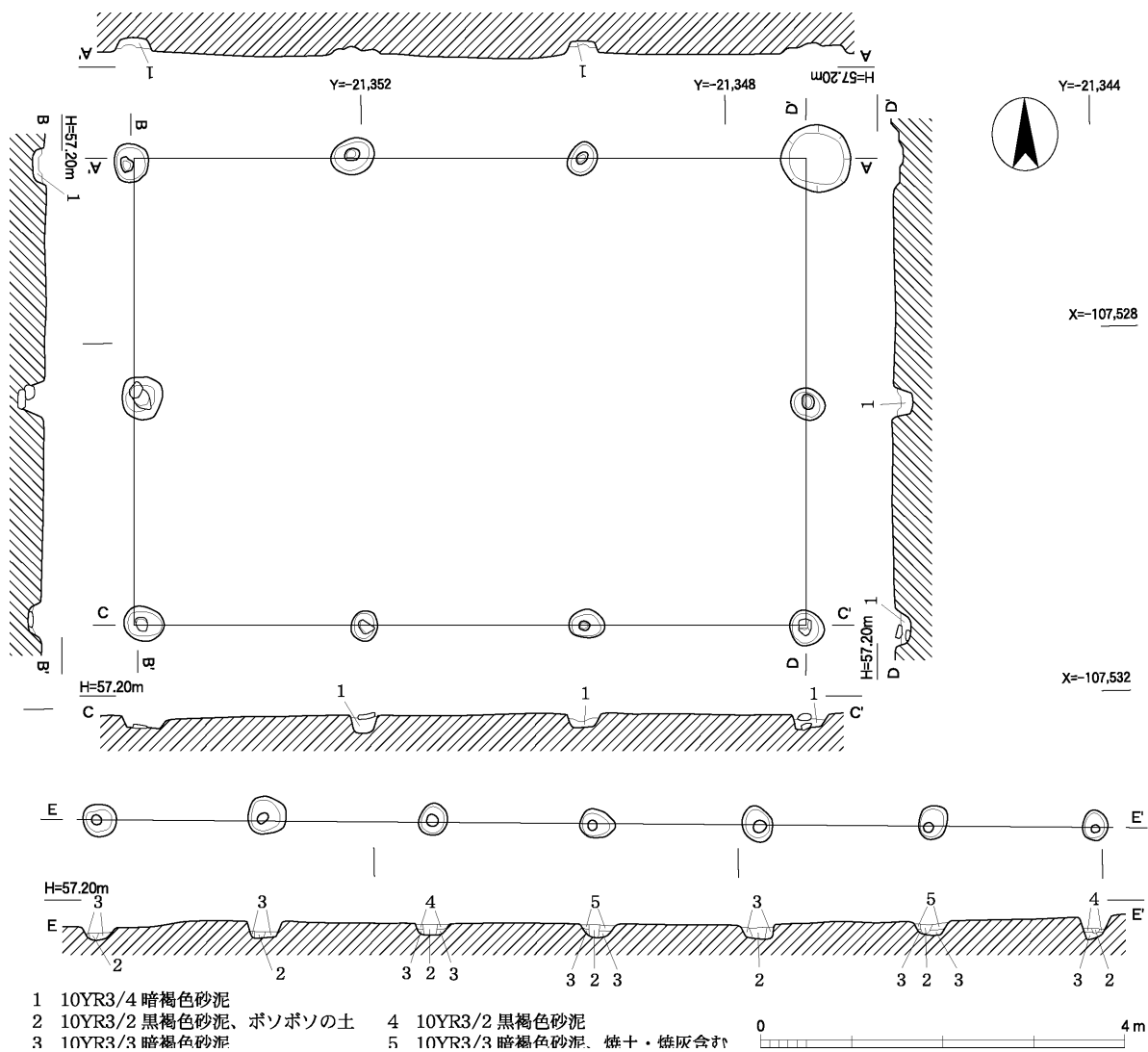


図21 3 トレンチ第2面 掘立柱建物1・柵列1実測図(1:80)

土壙13 トレンチ北半、西壁に掛かった状態で検出幅1.3m、深さ0.3mの土壙を検出した。土器器皿・瓦質の鍋と釜・山茶碗などが出土しており、中世の一括資料となる。

土壙60 基壇南部直下より検出した径0.8m、深さ0.2mの円形土壙で、15世紀末～16世紀初頭の土器群を検出している。基壇の上限が確定できる遺構である。

(6) 2・3 トレンチ第3面 (図22、図版6・7)

竪穴住居20棟と竪穴住居を切って成立する掘立柱建物1棟・柵列2列を検出した。

掘立柱建物2、柵列2・3 (図23、図版7-2) 3 トレンチ北半部で柱穴が1m四方、深さ0.6m、柱根跡約0.3mの掘立柱建物2を検出した。柱穴の南北方向は北でやや西に振る。南端となる妻側梁間は7尺等間、南北方向の桁行は7尺等間で、梁間2間×桁行3間分検出している。トレンチ北壁で柱穴304を検出しているが、北端妻側柱としては柱筋がずれており、柱穴も0.4mと浅く、この建物の北端を示すものではないと判断した。このことから、この建物はさらに北側のトレンチ外に延長し、少なくとも桁行4間以上の建物と考えられる。柱穴埋土から8世紀初頭と考えられる遺物を検出しているため、掘立柱建物2は8世紀以降に建てられた可能性が高い。

また掘立柱建物2に平行する2列の柵列2・3を検出している。柵列2は掘立柱建物2南西隅から南に延長線上6m(20尺)地点で西に7.2m展開する。柵列の柱穴は径0.7m、深さ0.5mの円形で、柱間はほぼ6尺である。柵列3は掘立柱建物南東隅から2.1m(7尺)東で掘立柱建物に平行して南に延びる。この柵列は4基の径0.5m、深さ0.5mの柱穴からなり、ややばらつきがあるが柱間6尺と考えられる。

これらの柵列は掘立柱建物を南側と東側で区画する位置にあり、掘立柱建物と併存していたものとする。掘立柱建物・柵列は、竪穴住居との切り合いから、竪穴住居を埋め戻して更地にしてから新たに建てられた可能性が高い。建物の規模・規格性・区画を伴うことからすれば邸宅施設などが考えられるが、詳細は不明である。

竪穴住居群 (図24～26、図版8・9) 一辺3～4mの隅丸方形の竪穴住居を2トレンチ北区から2棟(竪穴123・144)、3トレンチから9棟(竪穴180・189・196・215・216・218・277・300・302)、2トレンチ南区から9棟(竪穴78・82・85・87・96・98・105・106・107)検出している。竪穴住居の深さは検出面から深いもので25cmであるが、周溝と四柱穴だけ(竪穴144・107)の竪穴もあり、削平を受けているものもある。竪穴218には長さ35cm、幅25cmの台形の花崗岩製切石が、竪穴196には竈付近に一抱えほどの不定形な花崗岩が、竪穴302北東隅には径20cmの円形で扁平な石が据えられていた。竪穴住居群の存続時期は、出土遺物の検討により7世紀半ばから7世紀後半に限定できる。

竪穴住居の規模・重複関係・出土遺物・方位などについては一覧できるように表2にまとめたとおりである。この表からも理解できるように竈の取り付け位置および竪穴住居の方位は一定していない。しかし重複関係が新しいものほど正方位の北に向かう傾向が見られる。また古いものが新しいものより若干深い傾向が見られる。竪穴住居の重複切合関係は4回が最大で短期間に連

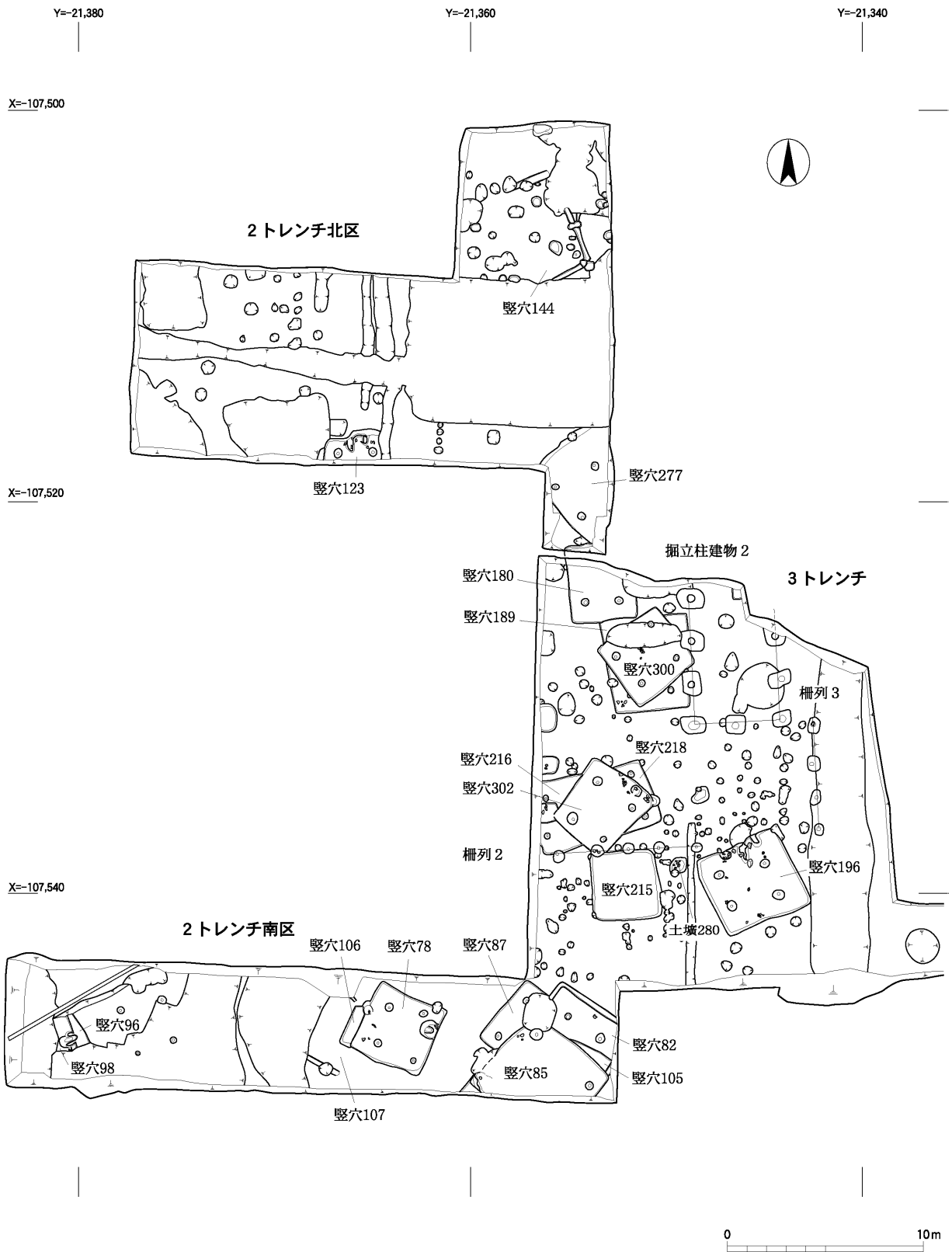
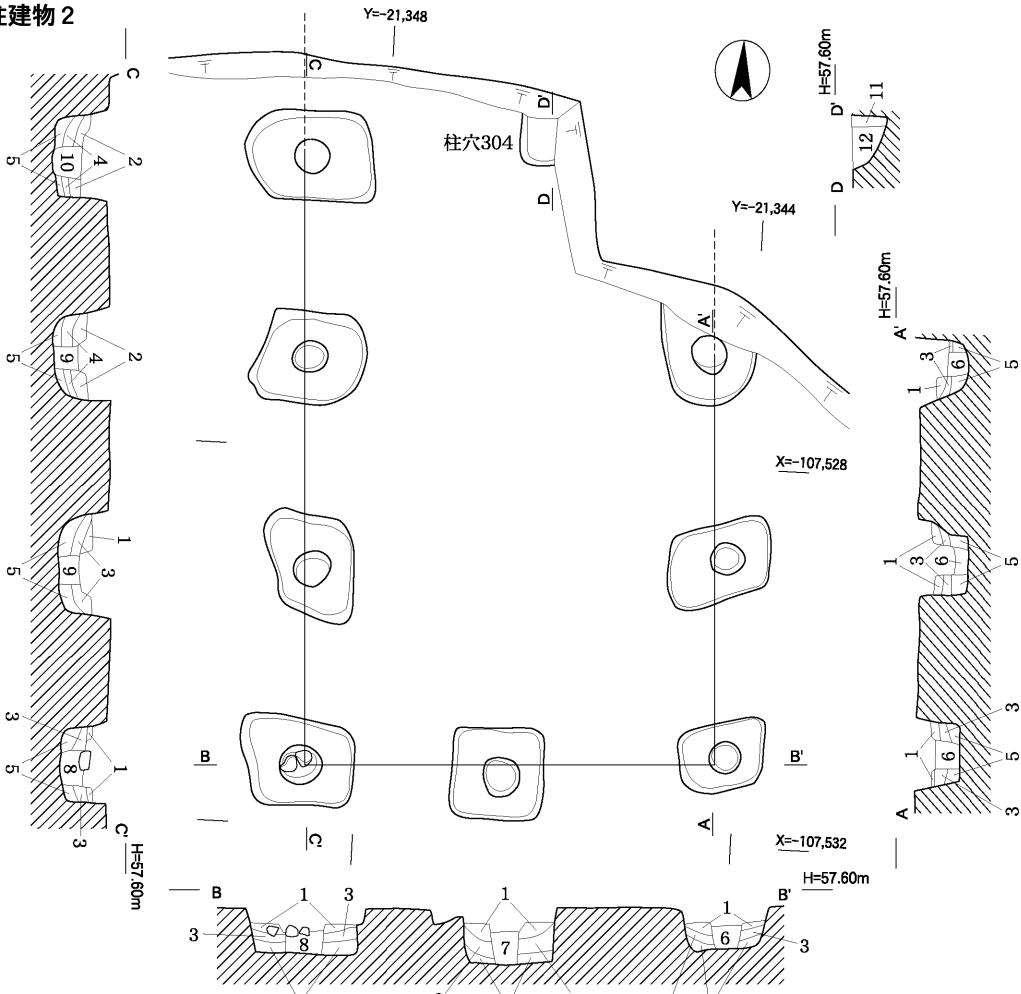


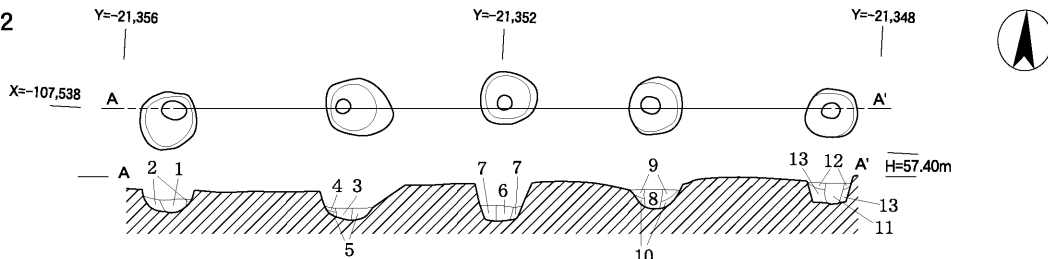
図22 2・3トレンチ第3面遺構平面図(1:300)

掘立柱建物 2



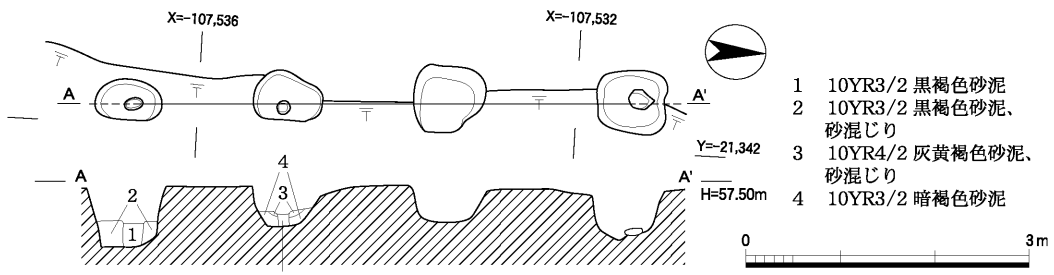
- | | | |
|--------------------------------|-------------------------|-----------------------|
| 1 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、砂混じり | 9 10YR3/3 暗褐色砂泥、砂混じり |
| 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、黄色ブロック・砂混じり | 6 10YR3/3 暗褐色砂泥、砂混じり | 10 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 |
| 3 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 7 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 11 10YR3/3 暗褐色砂泥、砂混じり |
| 4 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、砂混じり | 8 10YR2/3 黒褐色砂泥、土師器片含む | 12 10YR3/4 暗褐色砂泥、砂混じり |

柵列 2



- | | | |
|------------------------|---------------------|---------------------|
| 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 6 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 11 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 |
| 2 10YR4/4 褐色砂泥、小〜中礫混じり | 7 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 12 10YR4/4 褐色砂泥 |
| 3 10YR3/4 暗褐色砂泥、砂混じり | 8 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 13 10YR3/4 暗褐色砂泥 |
| 4 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 9 10YR4/4 褐色砂泥 | |
| 5 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 10 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | |

柵列 3



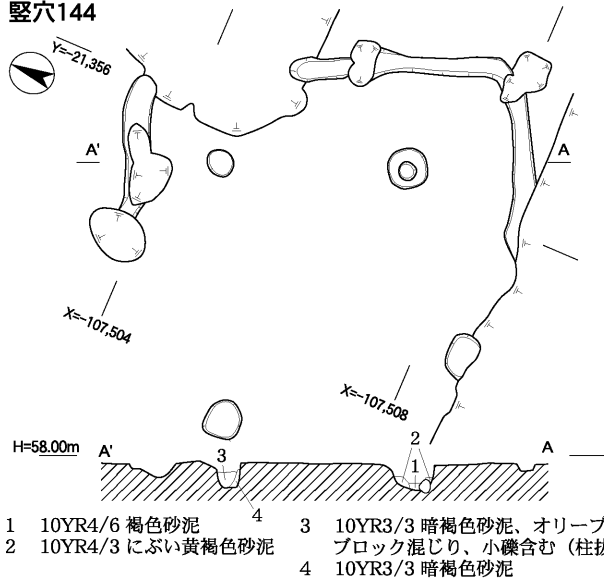
- | |
|-----------------------|
| 1 10YR3/2 黒褐色砂泥 |
| 2 10YR3/2 黒褐色砂泥、砂混じり |
| 3 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、砂混じり |
| 4 10YR3/2 暗褐色砂泥 |

図23 3トレンチ第3面 掘立柱建物2、柵列2・3実測図(1:80)

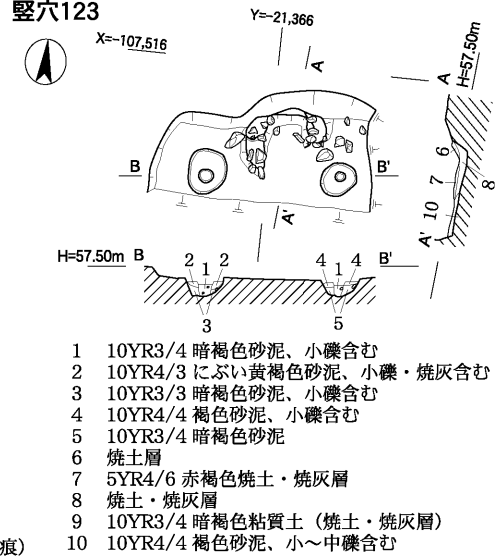
表2 竪穴住居一覧表

地区	竪穴番号	検出規模 (cm)	深さ (cm)	真北から の傾き	重複関係	器			遺物						備考					
						有無	竪穴石 の有無	付設位置	製鉄関連遺物			瓦				土器類				
									有無	鉄滓 個数	重量	鑄羽口	炉壁	土蒔器		須恵器				
														破片数		重量	破片数	重量		
2ト1北区	竪穴144	530×260～	-	西25°																
2ト1北区	竪穴123	100～×290～	8～23	正北		○	×	北壁								47片	535g	4片	550g	
3ト1	竪穴277	440～×420～	2～6	西40°												12片	150g	4片	120g	
3ト1	竪穴180	400～×345	3～8	西5°												48片	425g	12片	180g	
3ト1	竪穴189	490×450	7	西5°		○	×	北壁	○	2個	510g	○	60g		94片	945g	14片	385g		厨溝をもつ
3ト1	竪穴300	360×380	8～11	西35°					○	3個	125g				96片	1,265g	12片	315g		
3ト1	竪穴216	360×330	10～13	西20°		○		東壁	○	12個	100g				57片	625g	4片	120g		
3ト1	竪穴218	340～×320	3～9	西15°		○		東壁	○	14個	290g		310g		113片	800g	2片	8g	台形の花崗岩を 床に据える	
3ト1	竪穴302	410×350	11～15	東40°		○		北東壁	○	3個	20g				219片	1,850g	1片	10g	円形の石を床に 据える	
3ト1	竪穴215	355×350	20	西5°					○	1個	20g				26片	310g	84片	420g		
3ト1	竪穴196	430×460	15～23	西30°		○	×	北壁	○	29個	900g	○			359片	3,325g	117片	1,610g	不定形の花崗岩を床 に据える。越石出上 厨溝をもつ	
2ト1南区	竪穴82	450～×420	5～16	東35°					○	24個	530g				213片	1,925g	37片	315g		
2ト1南区	竪穴105	320～×200～	8～13	東30°											52片	350g	3片	50g		
2ト1南区	竪穴85	520×520～	20	西45°		○		北西壁	○	1個	100g				106片	780g	12片	120g		
2ト1南区	竪穴87	390×150～	3	東35°					○	2個	285g				5片	25g				
2ト1南区	竪穴78	380×370	20～25	東25°		○	×	東壁	○	2個	75g				203片	1,600g	11片	180g		
2ト1南区	竪穴107	390×190～	-	東35°											5片	35g				
2ト1南区	竪穴106	200～×60～	15～20	東25°											29片	160g				
2ト1南区	竪穴98	170～×110～	3	西20°		○		東壁							26片	275g	4片	70g		
2ト1南区	竪穴96	170～×50～	2	西25°																
総計					20基	9棟	5棟		11棟	93個	2,955g	2棟	370g	2棟	1,722片	15,430g	321片	4,453g		

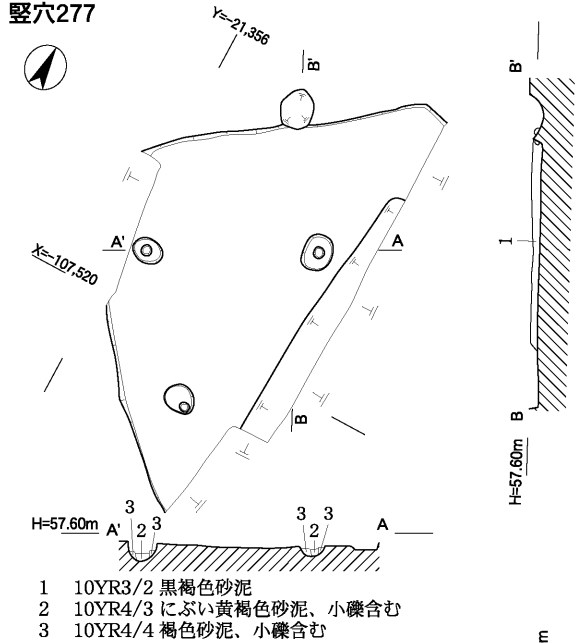
竪穴144



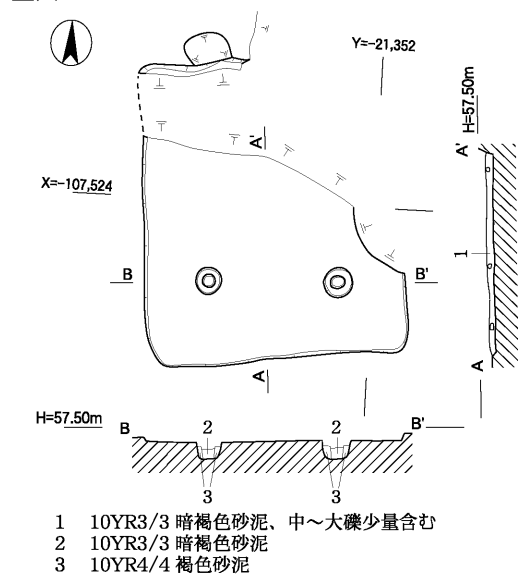
竪穴123



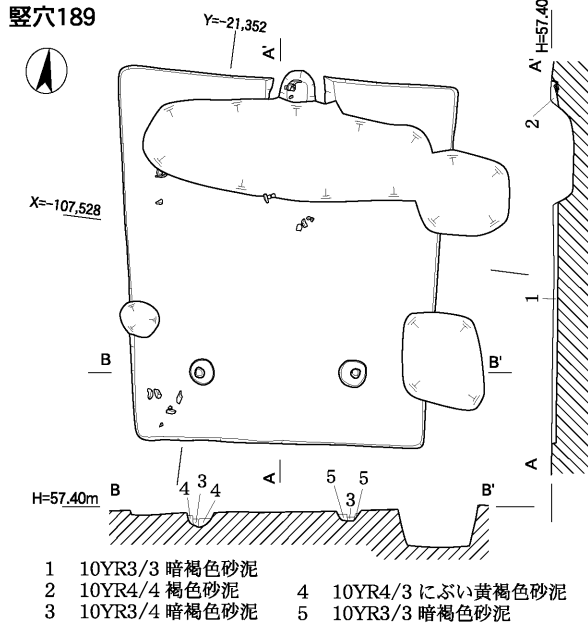
竪穴277



竪穴180



竪穴189



竪穴300

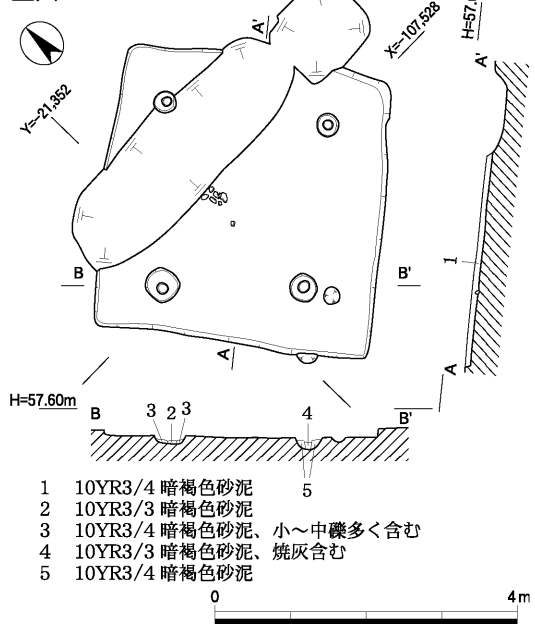


図24 竪穴住居(竪穴144・123・277・180・189・300)実測図(1:100)

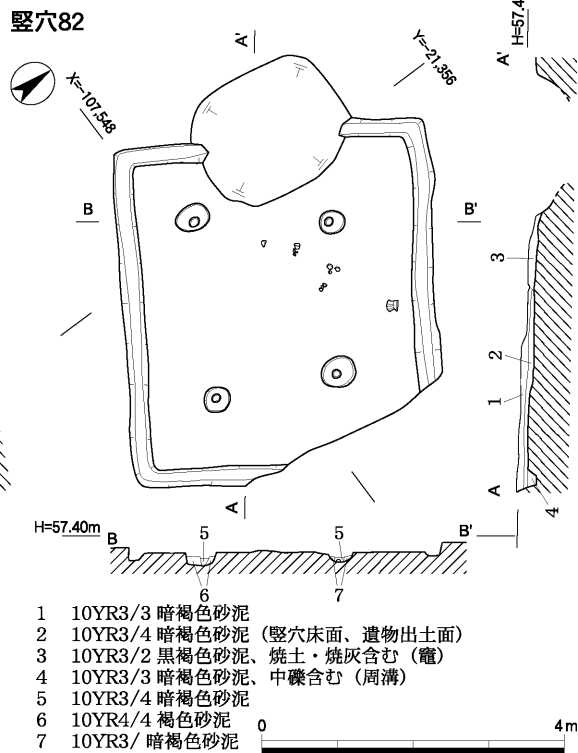
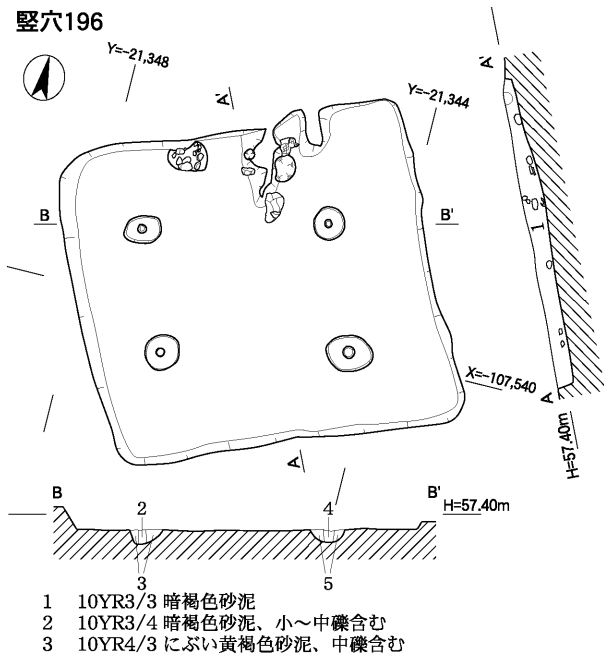
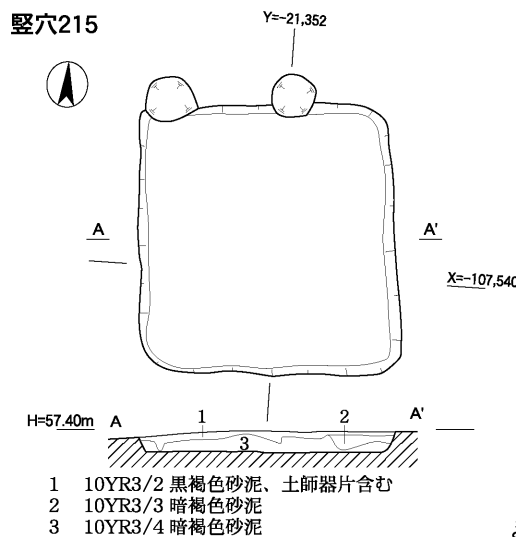
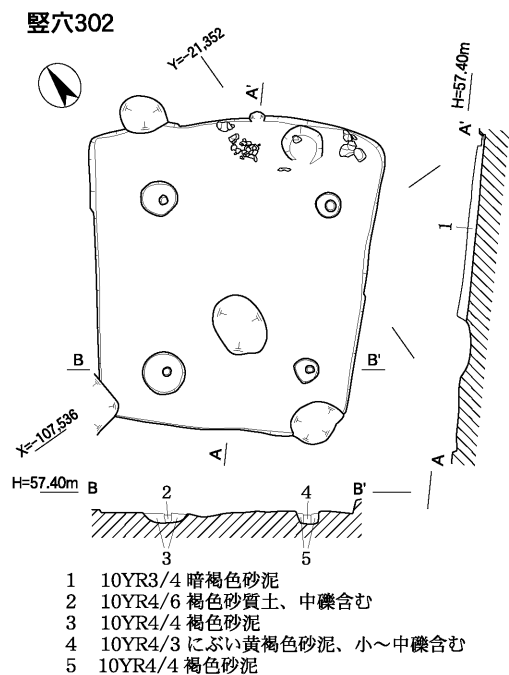
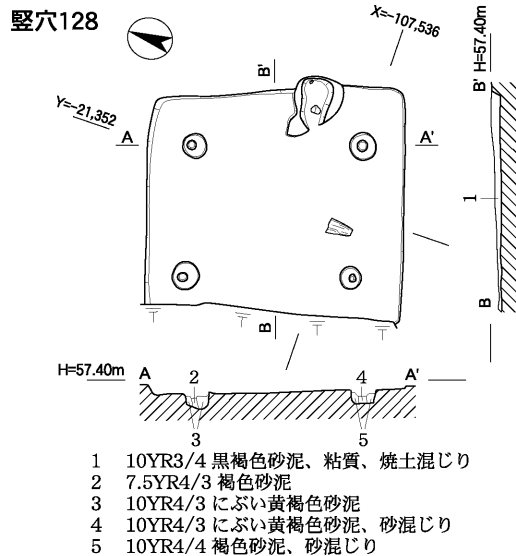
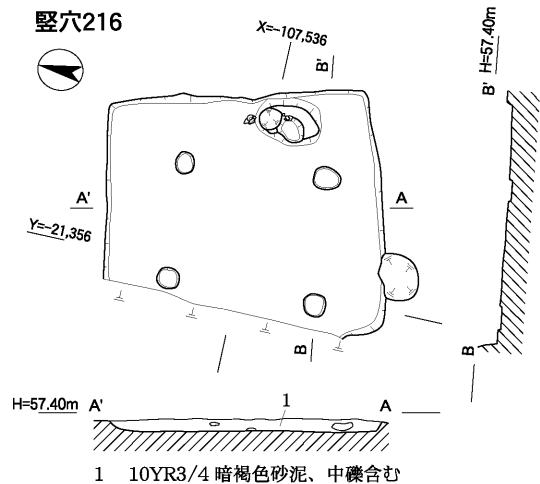
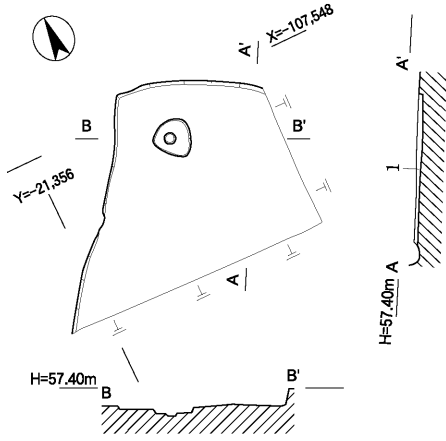


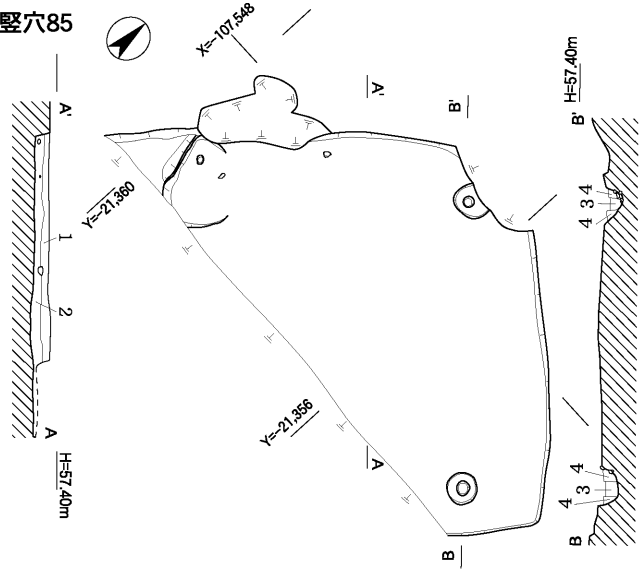
図25 竪穴住居 (竪穴216・218・302・215・196・82) 実測図 (1:100)

竪穴105



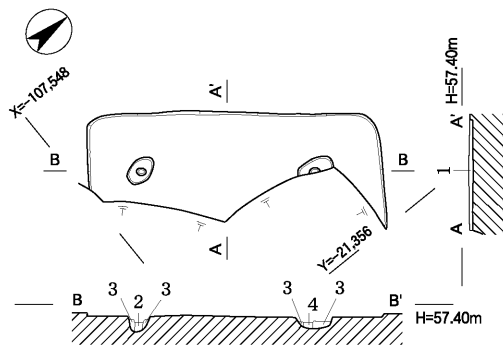
- 1 2.5YR3/3 暗オリーブ褐色砂泥、粘質、小～中礫含む

竪穴85



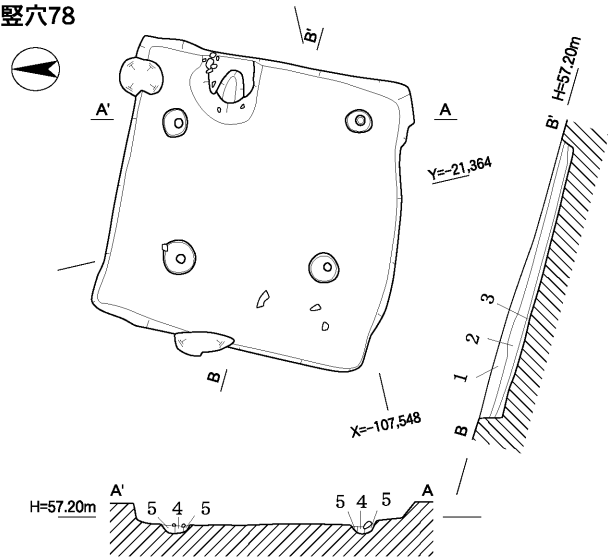
- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥、粘質、焼灰・土器片含む
 2 10YR3/4 暗褐色砂泥、焼灰・小礫含む
 3 10YR3/3 暗褐色砂泥、やや粘質、焼灰含む
 4 10YR3/4 暗褐色砂泥、直径10cmまでの礫を含む

竪穴87



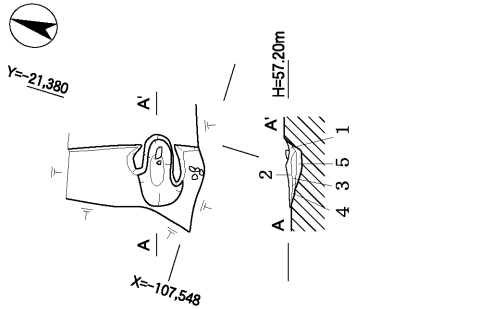
- 1 10YR3/4 暗褐色砂泥
 2 10YR3/3 暗褐色砂泥、小礫含む
 3 10YR3/4 暗褐色砂泥
 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、炭粒含む

竪穴78



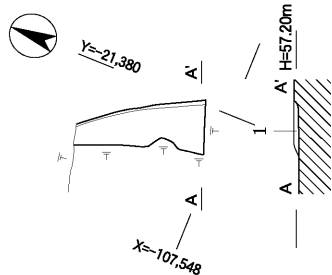
- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥
 2 7.5YR3/2 黒褐色砂泥、中礫含む
 3 7.5YR3/3 暗褐色砂泥、粘質
 4 10YR3/4 暗褐色砂泥
 5 10YR4/4 褐色砂泥、中礫含む

竪穴98



- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥、やや脆い
 2 10YR3/4 暗褐色砂泥、砂・焼土混じり
 3 焼土層
 4 10YR3/4 暗褐色砂泥、焼土混じり
 5 7.5YR3/4 暗褐色砂泥、焼土混じり

竪穴96



- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥、小礫含む

竪穴107

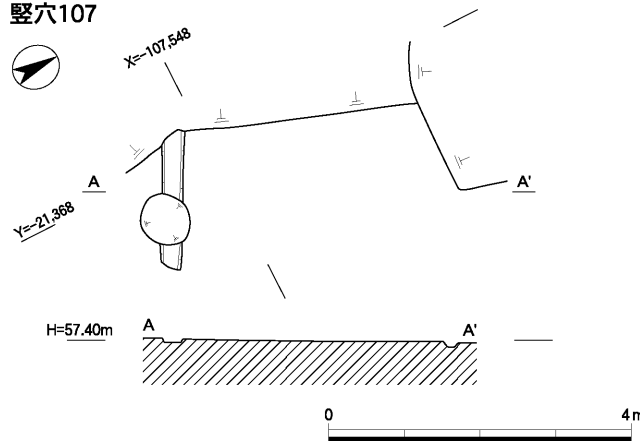
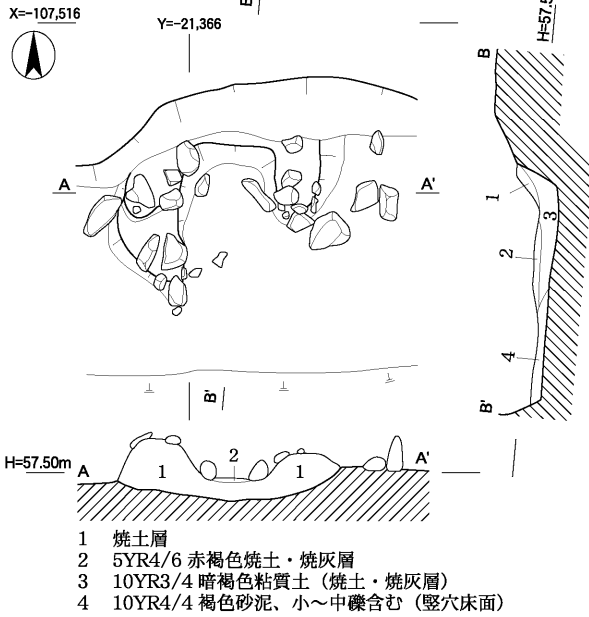
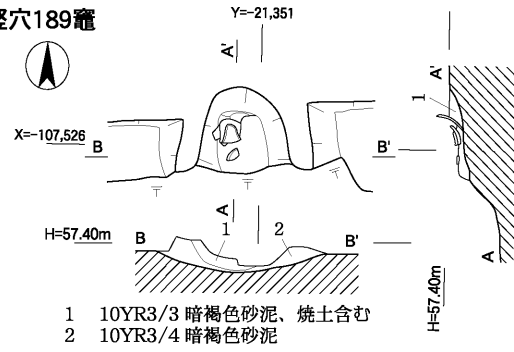


図26 竪穴住居 (竪穴105・85・87・78・107・98・96) 実測図 (1:100)

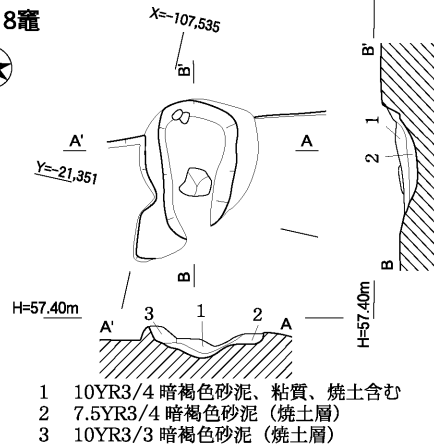
竖穴123竈



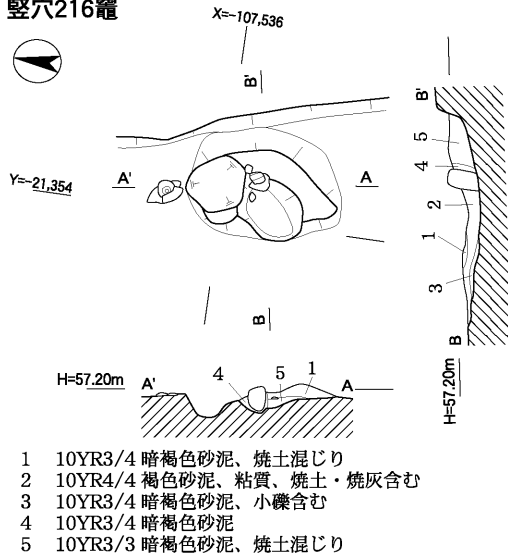
竖穴189竈



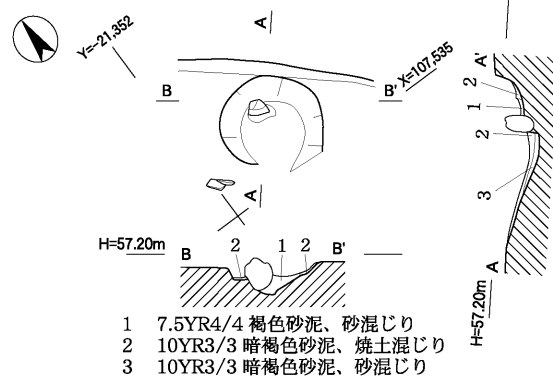
竖穴218竈



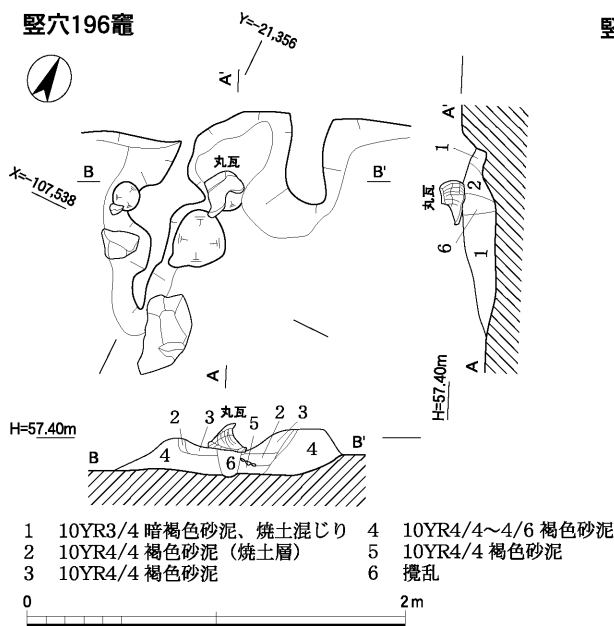
竖穴216竈



竖穴302竈



竖穴196竈



竖穴85竈

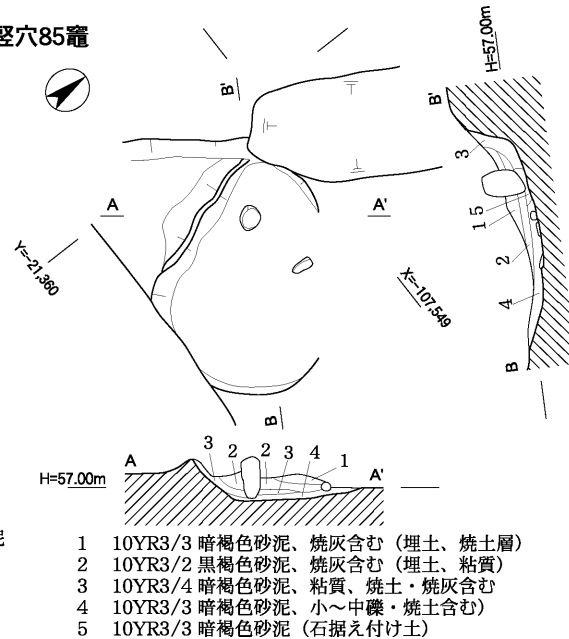


図27 竖穴住居内竈（竖穴123・189・216・218・302・196・85）実測図（1：40）

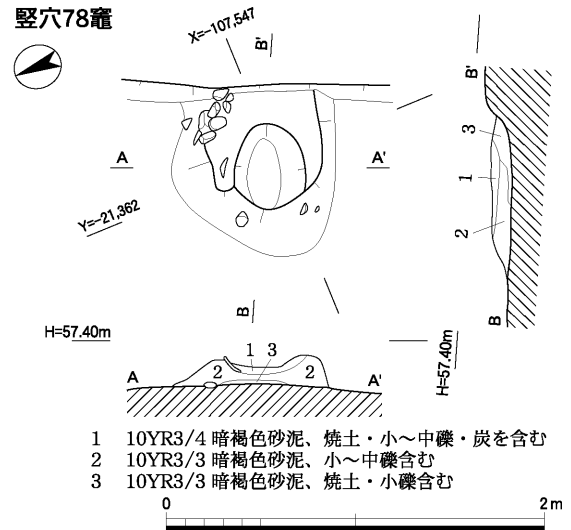
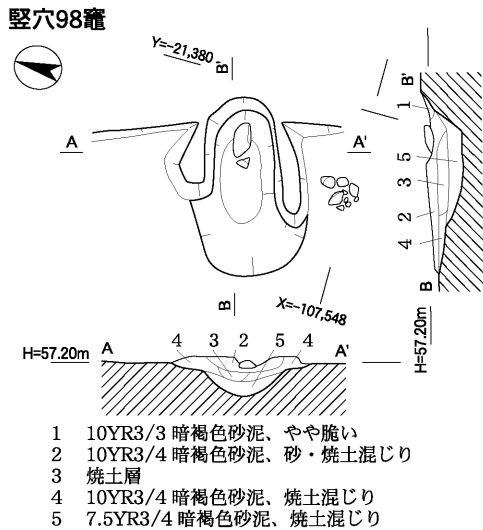


図28 竪穴住居内竈（竪穴98・78）実測図（1：40）

続して建て替えられたと考えられる。また重複関係からいくつかのグループに分類でき、併存関係がある。床土は竪穴底が礫層になる場合に見られたが、シルト層が底の場合は検出できなかったものが多い。竪穴196だけが拳大の礫と砂礫で一度に埋め戻されていたが、他の竪穴内埋土も分層が不可能な竪穴が多い。特に竪穴215は四柱穴・竈がなく完成前に放棄され一度に埋め戻された可能性が高い。また火災で焼失した痕跡はない。

竈（図27・28） 竈は竪穴住居壁一辺のほぼ中央部に取り付け、9基（竪穴78・85・98・123・189・196・216・

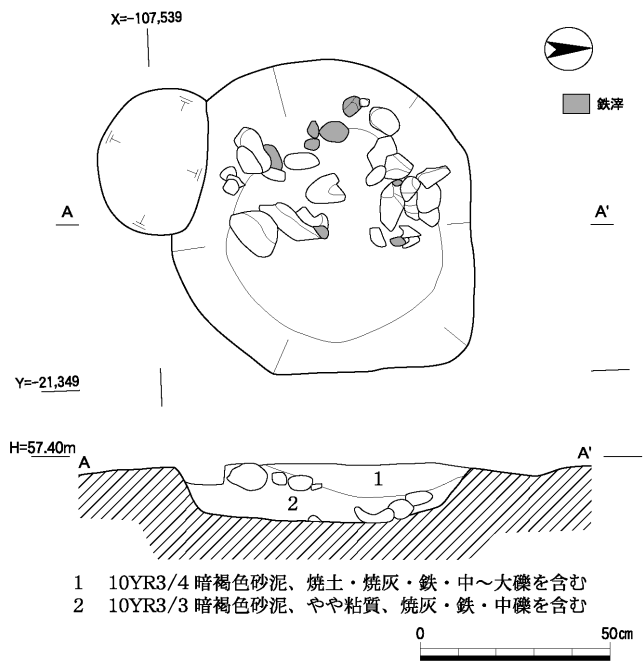


図29 3トレンチ第3面 土壤280実測図（1：20）

218・302）検出しているが原形を留めないものが多い。竈の煙出部は検出していない。竈は幅0.6～0.8m、長さ0.8m前後で竈底まで被熱によって赤く変色していた。竈9基の内4基の竈内に上面が平らな自然石を用いた支柱石が残存して据えられていた（竪穴85・98・216・302）。竈高は0.1～0.2m前後で支柱石とほぼ同じ高さで検出された。

土壤280（図29、図版8-1） 竪穴196と竪穴300の間に検出した0.8m、深さ0.2mの円形の土壤で、鉄滓・鞆羽口・礫・焼土が詰め込まれていた。この土壤に被熱した様相はないので、精錬過程で生じた廃棄物の破棄土壤と考える。

註

1) 『大本山相国寺境内の発掘調査・承天閣地点の埋蔵文化財』 大本山相国寺承天閣美術館 1984年

4. 遺物

出土遺物は整理箱にして188箱出土した。土器類は縄文時代から江戸時代まで、瓦・埴類は飛鳥時代から江戸時代までの遺物が出土している。金属類では竪穴住居から出土した鉄滓・鍛造剥片がある。以下、主要な遺物について概説する。なお平安時代以降の土師器編年については小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」¹⁾に従う。

(1) 土器類 (図30～33、図版10・11)

縄文土器 (図30 - 1) 磨消文が明瞭な縄文時代後期・中津式土器甕破片 (1) を2トレンチ北区掘込地業1から検出している。

弥生土器 (図30 - 2) 弥生時代後期の甕底破片 (2) が飛鳥時代の3トレンチ竪穴300から出土している。

篋文字入須恵器 (図30 - 3) 中世の2トレンチ北区掘込地業1から出土したので、時代は確定できない。須恵器蓋の可能性もある。篋文字で横から書かれていた。「草」と判読したが文字下半部が欠けているので確定できない。

竪穴住居群出土土器 (図31 - 4～37、表4) 2・3トレンチ竪穴住居群から7世紀の中葉から後半にかけて

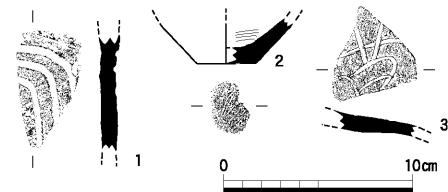


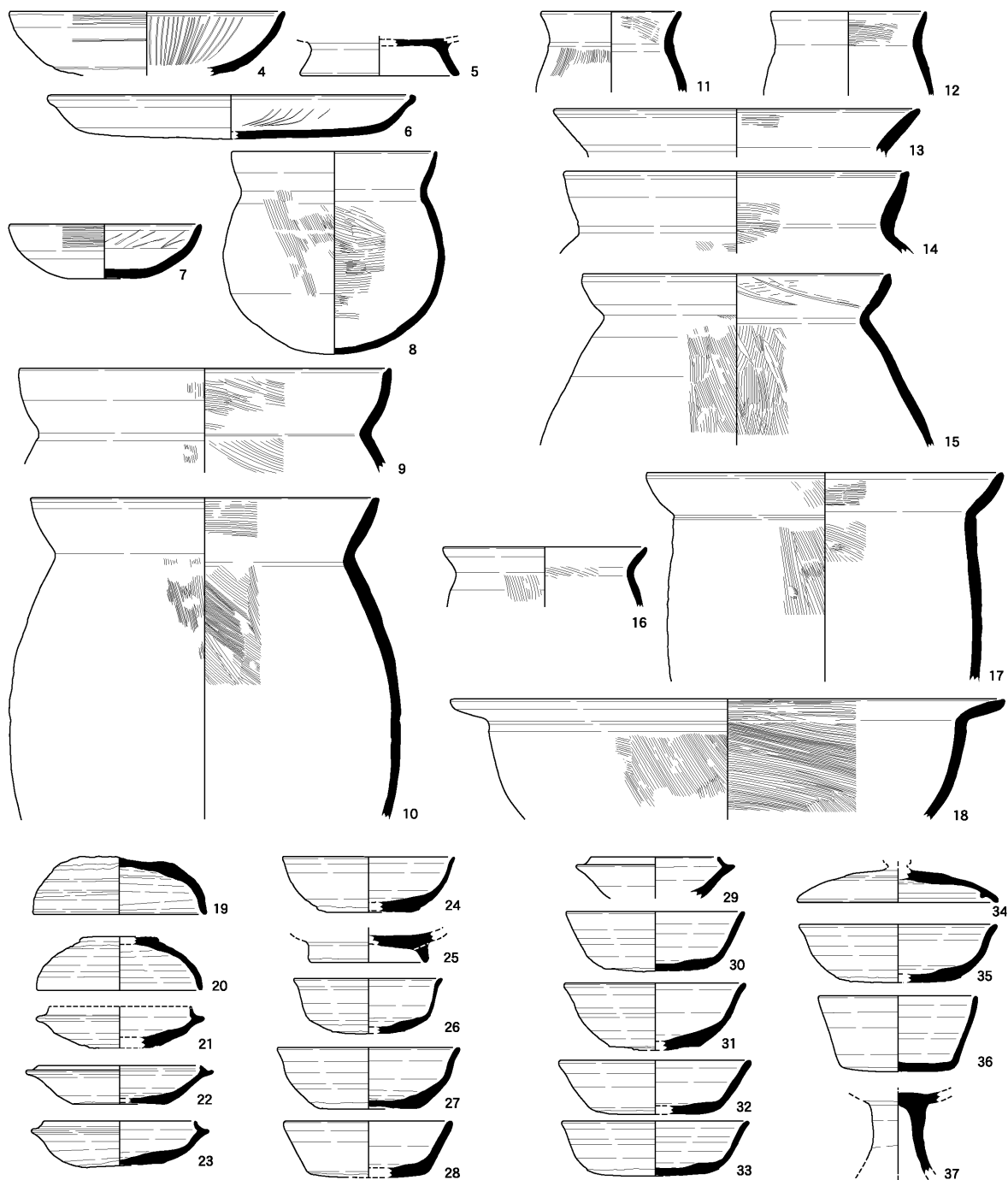
図30 縄文土器・弥生土器・篋文字入須恵器実測図 (1:4)

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	縄文土器	1箱	縄文土器1点	0箱	0箱
弥生時代	弥生土器		弥生土器1点		
飛鳥時代 ～奈良時代	土師器・須恵器・瓦・轆羽口・鉄滓・炉壁・石製品・鍛造剥片・粒状滓	25箱	土師器16点、須恵器31点、軒丸瓦1点、丸瓦2点、平瓦2点、轆羽口3点、鉄滓8点、炉壁1点、石製品3点、鍛造剥片1点、粒状滓1点	20箱	0箱
平安時代	緑釉陶器・輸入磁器・土師器	212箱	緑釉陶器4点、輸入磁器1点、軒平瓦2点	21箱	188箱
中世	土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器・瓦・ガラス製品		土師器27点、須恵器2点、瓦質土器8点、施釉陶器1点、輸入陶器1点、輸入磁器2点、軒平瓦2点、埴1点、ガラス製品1点、		
近世	土師器・施釉陶器・焼締陶器・磁器・輸入磁器・土製品・瓦・金属製品・石製品		土師器14点、土製品1点、軒丸瓦3点、軒平瓦2点		
合計		208箱	143点 (9箱)	36箱	163箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より20箱多くなっている。

竖穴住居群



掘立柱建物 2

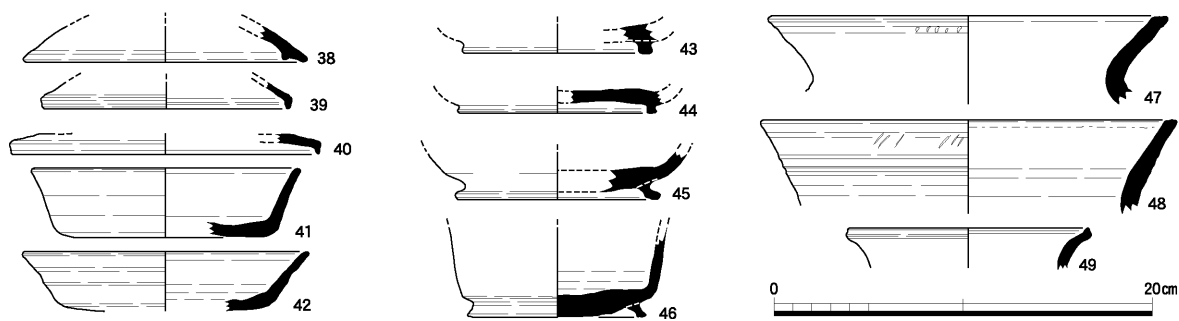


图31 竖穴住居群・掘立柱建物 2 出土土器实测图 (1 : 4)

表 4 - 1 竪穴住居・掘立柱建物出土土器類観察表

No.	器種・器形	出土遺構	焼成・色調	口径 (cm)	器高 (cm)	形態・調整
4	土師器 杯	竪穴85	良好 橙色	16.8		丸底に近い底部から湾曲して立ち上がり、口縁端部は内傾する。内面は緻密なヘラミガキに正放射暗文が施される。外面底部辺りはオサエのままで、体部と口縁はヘラミガキと簡素な暗文が施される。
5	土師器 高台	竪穴196	やや不良 橙色	高台 9.4		磨滅が著しい。高台は長く、ハの字状に開き、器壁は薄い。
6	土師器 皿	竪穴123	やや不良 橙色	22.1	2.8	体部から口縁にかけほぼ直線に開く。口縁端部は肥厚し、内側は小さく突起する。全体にヘラミガキが施され、内側には斜放射暗文が、外面口縁部付近には簡素な直線暗文が施される。
7	土師器 杯	竪穴302	良好 黄橙色	11.7	3.4	大きめの平底から内湾気味に立ち上がり、口縁端部は内傾する。内面はヘラミガキが施され、口縁部にヘラ掻き文様をめぐらす。外面のヘラミガキと暗文は口縁周辺の一部だけである。
8	土師器 甕	竪穴302	良好 にぶい橙色	12.5	12.6	短胴・丸底の小型の甕で、口縁は内湾気味にあまり開かず立ち上がる。口縁端部は尖り気味である。外面上半はハケメ痕が残り、下半底部付近はケズリ痕が残る。面はハケメとナデ痕が残る。口縁付近にスス痕が残る。
9	土師器 甕	竪穴302	良好 にぶい黄橙色	22.6		口縁は内湾状に開き、内傾する端部を持つ。外面、内面共にハケメ痕が見られる。ススは付着していない。
10	土師器 甕	竪穴302	良好 にぶい黄橙色	21.2		中胴の甕で、口縁は内湾気味に開き、端部はほぼ水平な端面を持つ。外面、内面共にハケメ痕が残る。
11	土師器 甕	竪穴98	良好 にぶい橙色	8.4		短胴、小型の甕で、口縁は直線的にあまり開かず立ち上がり、端部はそのまま丸くおさめる。ハケメ痕は内面口縁付近と外面体部上方に残るだけである。外面全体と内面口縁付近にススが付着している。
12	土師器 甕	竪穴216	やや不良 にぶい橙色	9.4		短胴、小型の甕で、口縁は直線的にあまり開かず立ち上がり、口縁は尖り気味である。口縁内側にハケメ痕がわずかに残る。ススは付着していない。
13	土師器 甕	竪穴189	やや不良 橙色	22.2		口縁は直線的に立ち上がり、内傾する端面をもつ。口縁内側にハケメ痕が残る。ススは付着していない。
14	土師器 甕	竪穴218	良好 橙色	21.0		口縁はやや内湾気味に開き、内傾する端面をもつ。端部は内・外共に肥厚する。内面体部にはハケメとナデ痕が残る。口縁と外面にもハケメが残る。ススは付着していない。
15	土師器 甕	竪穴82	良好 浅黄橙色	18.8		口縁は内湾しながら開き、端部は断面三角形を呈する。内面口縁部には斜方向のヘラ掻き痕が残り、ハケメもわずかに残る。内面体部には幅約1cmの強いハケメ痕が残り、その上からさらにハケメ調整がされる。ススは付着していない。
16	土師器 甕	竪穴78	やや不良 浅黄橙色	12.4		短胴、小型の甕で、口縁は直線的に開きそのまま丸くおさめる。内面口縁部と外面にハケメ痕が残る。ススは付着していない。
17	土師器 甕	竪穴78	良好 浅黄橙色	21.8		口縁は内湾して立ち上がり、内傾する端面をもつ。外面は口縁部から体部にかけハケメ痕が残り、口縁部はその上からナデられる。内面にもハケメ痕が残る。ススは付着していない。
18	土師器 鍋	竪穴78	良好 浅黄橙色	33.8		直線的に強く開く口縁をもつ鍋である。端面は垂直で上端はわずかに突起する。内面には細かいハケメ痕が残る。外面には斜方向のハケメ痕が残り、全体にススが付着する。
19	須恵器 杯蓋	竪穴85	良好 灰色	10.7	3.6	天井外面のケズリは省かれており未調整である。ヘラ切りの痕がわずかに残る。器形は全体的に丸みを帯びており、口縁は直立する。
20	須恵器 杯蓋	竪穴98	良好 青灰色	10.0	3.3	天井部から体部に渡って丸みを帯びながらやや笠型に開く。口縁部は直立する。天井部は未調整である。天井部と体部の境にヘラ（ケズリかヘラ切りかは不明）の痕が残る。
21	須恵器 杯身	竪穴180	やや不良 灰白色	受け部 10.4	2.5	蓋受けの立ち上がりが体部と明瞭に区分され、古墳時代からの系統をひく形になっている。底部は未調整である。
22	須恵器 杯身	竪穴180	良好 灰白色	受け部 11.6	2.4	蓋受けの立ち上がりは体部と明瞭には区分されず、その断面は三角形を呈する。底部はケズリなどの調整はされていないものの平らに整形されている。
23	須恵器 杯身	竪穴78	良好 灰色	受け部 11.0	2.9	蓋受けの立ち上がりは体部と明瞭には区分されず、その断面は三角形を呈する。底部は成形段階で大きく歪んでおりケズリなどの調整はされていないものの、ナデにより平らに整形されている。底部と体部の境辺りにヘラケズリのような痕が残る。
24	須恵器 杯身	竪穴82	良好 青灰色	10.5	3.4	底部から体部にかけ丸みをもって立ち上がり、口縁は外反する。底部は未調整だが平らにはなっている。底部隅に細かいヘラ切り痕が残る。長石を多量に含み、焼成も他のものとは違った印象をもつ。
25	須恵器 杯身	竪穴189	やや不良 灰白色	高台 7.0		高台は外に張り出しておらず、断面はずんぐりと四角形である。高台貼り付け部は回転ナデが施され、高台裏はケズリの後ナデで調整されている。

表 4 - 2 竪穴住居・掘立柱建物出土土器類観察表

No.	器種・器形	出土遺構	焼成・色調	口径 (cm)	器高 (cm)	形態・調整
26	須恵器 杯身	竪穴300	やや不良 灰白色	9.0	3.4	底部から体部にかけて丸みをもって立ち上がり、口縁は外反する。底部と体部の境にヘラケズリらしき痕が残り、底部はケズリのあとナデが施されている。胎土は細やかで他の物とは違った印象をもつ。
27	須恵器 杯身	竪穴216	やや不良 灰白色	11.0	3.8	底部から体部にかけて丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反する。外面底部には粘土紐を巻いて成形したような痕が見られ、オサエやナデで調整される。直線状の細かいヘラ切り痕がわずかに残る。
28	須恵器 杯身	竪穴277	やや不良 灰白色	10.4	3.5	底部は平らで未調整である。細かいヘラ切り痕が残る。底部から体部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部部はそのまま丸くおさめる。器壁は厚くずんぐりしている。
29	須恵器 杯身	竪穴196	良好 灰色	受け部 9.8	2.6	蓋受けの立ち上がりが体部と明瞭に区分され、古墳時代からの系統をひく形になっている。
30	須恵器 杯身	竪穴196	やや不良 灰白色	10.9	3.7	底部から体部にかけて丸みを持って立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。外面底部は粘土紐を巻いて成形したような痕が見られその上から回転ナデが施される。底部と体部の境に細かいヘラ切り痕が残る。
31	須恵器 杯身	竪穴196	良好 灰白色	11.0	4.2	底部と体部の境は明瞭であり、丸みを持って立ち上がる。口縁部は外反する。底部は未調整だが、かなり平らに切られている。底部中心部にヘラ切り時に残ったと見られる粘土の塊が残る。
32	須恵器 杯身	竪穴196	不良 白色	11.6	3.4	底部から体部にかけて丸みを持って立ち上がり、口縁部はそのまま丸くおさめる。底部はナデにより平らに調整されている。細かいヘラ切り痕が残る。
33	須恵器 杯身	竪穴196	やや不良 灰白色	11.4	3.4	底部から体部にかけて丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反する。底部には直線状のヘラ切り痕が残り、その上からナデとオサエが施され平らになっている。
34	須恵器 杯蓋	竪穴196	良好 灰色	12.2		かえりは小さく退化しており上のほうに付いている。器形はゆるやかな丸みをもって広がり、口縁部は丸くおさめ下方へと伸びる。外面全体にオリブ色の自然釉がかかる。
35	須恵器 杯身	竪穴196	やや不良 灰白色	12.0	3.6	底部はやや丸みを持っており体部にかけて丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反する。細かいヘラ切り痕とナデ痕がわずかに残る。
36	須恵器 杯身	竪穴196	良好 灰色	9.6	4.7	平らな底部には回転ヘラケズリが施されていおり、体部との境は少し丸みを持ち、口縁部にかけて直線的に立ち上がる。体部が長く、器壁が薄い。焼成は良好で硬質、自然釉がわずかにかかる。
37	須恵器 高杯	竪穴196	不良 白色			高杯の頸部である。高杯は竪穴群では唯一の出土となる。
38	須恵器 杯蓋	掘立柱 建物 2	やや不良 灰白色	15.0		かえりを持ち、口縁部を丸くおさめ下方へと伸びる。口縁部の内側に溝状のへこみを持つ。外面の回転ナデの隙間にケズリの痕が残る。
39	須恵器 杯蓋	掘立柱 建物 2	良好 灰色	13.2		かえりを持たず、端部に身かかりを持つ蓋である。
40	須恵器 杯蓋	掘立柱 建物 2	良好 灰色	16.4		かえりを持たず、端部を折り曲げるようにして身かかりをつくる。
41	須恵器 杯身	掘立柱 建物 2	良好 灰色	14.2	3.7	底部から体部にかけて丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反気味である。底部は平らになっており、ヘラ切り痕が残る。胎土は灰色だが表面は褐色に変色している。
42	須恵器 杯身	掘立柱 建物 2	やや不良 会箔	15.1	3.2	底部と体部の境は明瞭であり、体部から口縁部にかけて丸みを持って立ち上がる。底部は平らになっている。
43	須恵器 杯身	掘立柱 建物 2	やや不良 灰白色	高台 10.0		高台は外に張り出しておらず、断面はずんぐりと四角形である。高台貼り付け部は回転ナデが施される。
44	須恵器 杯身	掘立柱 建物 2	良好 灰色	高台 10.5		高台は低く小さく、底部の外側のほうに貼り付けられている。
45	須恵器 杯身	掘立柱 建物 2	良好 灰色	高台 10.8		高台は高く、外へ大きくハの字状に開く。外面全体にまばらに自然釉がかかる。
46	須恵器 杯身	掘立柱 建物 2	良好 灰色	高台 9.4		高台はハの字状に外へ開き、底部の外側の方に貼り付けられる。底部は回転ケズリの上から回転ナデが施され、中心は接地している。
47	須恵器 甕	掘立柱 建物 2	良好 黒褐色	21.0		小型の甕で、口縁は直線的に開き水平の端面を持つ。口縁外端は丸みを持って張り出しており、内端はやや肥厚気味である。胎土は赤みがかったり。
48	須恵器 甕	掘立柱 建物 2	良好 灰白	22.0		小～中型の甕で、口縁は直線的に開き水平な端面を持つ。内面には黒褐色の自然釉がかかる。
49	土師器 甕	掘立柱 建物 2	良好 赤褐色	12.9		小型の甕で、全体がにぶい赤褐色に変化している。口縁は外反して開き外傾の端面を持つ。端部内側は突起している。内面にはスガが付着している。

の土師器・須恵器を検出している。竪穴住居群の土師器と須恵器の総重量は19,883gであるが、小片で図化できる遺物は少なく、使用できる土器類は持ち出された様相を呈している。その中でも竪穴の重複がない3トレンチ竪穴196からの出土遺物が比較的が多い。出土比率は重量で比較すると土師器が78.4%に対し須恵器が21.6%しかなく、須恵器の比率が少ない。

土師器は皿・杯・鍋・甕が出土しており、煮沸形態の土師器には煤が付着している(4~18)。ただし竈底に敷かれていた甕片を除いて竈に据えられた状態での検出はない。土師器は年代を特定しにくい表面の色調が明橙色の皿・杯には内面に放射状の暗文、外面に不鮮明な平行ヘラミガキがある(4・6・7)。また高台付き皿、もしくは杯(5)は器表が荒れており暗文は不明である。

須恵器は杯身・杯蓋・高杯・甕・壺などが出土している(19~37)。須恵器はやや小型で焼きの甘いものが多く在地系須恵器と考えられる。身に蓋受けの返りがあり、蓋に身受けの返りのない古墳時代の形態を受け継いだ有蓋杯タイプ(19~23・29)と、蓋受けの返りがなくなり底が平らで腰から立ち上がる杯身タイプ(24・26~28・30~33・35・36)に大別でき、前者が竪穴住居群の上限を示すものであろう。後者の高台なしの杯身が大部分を占めているが、竪穴196からはその他、蓋に宝珠つまみ痕が残り身受けの返りがある蓋(34)と、高台を持つ杯身(25)が各1点出土している。しかし蓋受けの返りのある杯身(29)もそこから出土しており、形態で時期差を特定することは困難である。また深めの杯(36)は底部を回転による篋によって平らに調整しており異質である。焼成も他と比べてやや堅い。高杯(37)は焼きが甘く、胎土が瓦質土器に類似し白っぽい。

これらの土器は7世紀後半が中心で、8世紀には入らないと判断した。

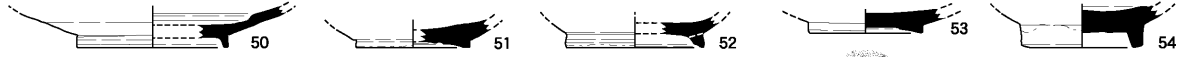
掘立柱建物2出土土器(図31-38~49、表4) 3トレンチ掘立柱建物2から出土した土師器・須恵器の総重量は5,430gと多い。竪穴住居と重複して建てられているため竪穴住居の土器が多く混ざったものと思われる。竪穴住居と同時期の遺物の外に、8世紀初頭と考えられる須恵器を検出しており、高台付き杯(43・44)、身受けの返りがない杯蓋(39・40)が出土している。高台のない杯は竪穴住居群のものより大型で焼成も堅いものが多い(41・42)。竪穴住居群から出土がなかった壺と考えた高台は八の字に開き外側にへしゃげている(45・46)。土師器と須恵器の比率は土師器が52.4%であるのに対し須恵器が46.6%で須恵器の比率が高く、竪穴住居群の出土比率と異なっている。土師器で図化できたのは小型甕(49)のみである。

平安時代包含層出土土器(図32-50~52) 平安時代の包含層から9世紀後半代と考えられる緑釉陶器破片が出土している。(50)は段皿で東海系の貼り付け高台で、(51)は京都近郊産で削り出し高台である。(50・51)は薄い緑色の釉が全面に掛かる。(52)は近江系で濃い緑釉が掛かり高台内面は露胎である。この緑釉陶器のみ10世紀以降の可能性が高い。51は2トレンチ、50・52は3トレンチ出土。

土壌62出土土器(図32-53・54) 2トレンチ南区土壌62から9世紀後半代と考えられる蛇目高台の京都産の緑釉陶器が出土している(50)。胎土はやや硬質で高台内面は露胎である。高台挟

平安時代包含層

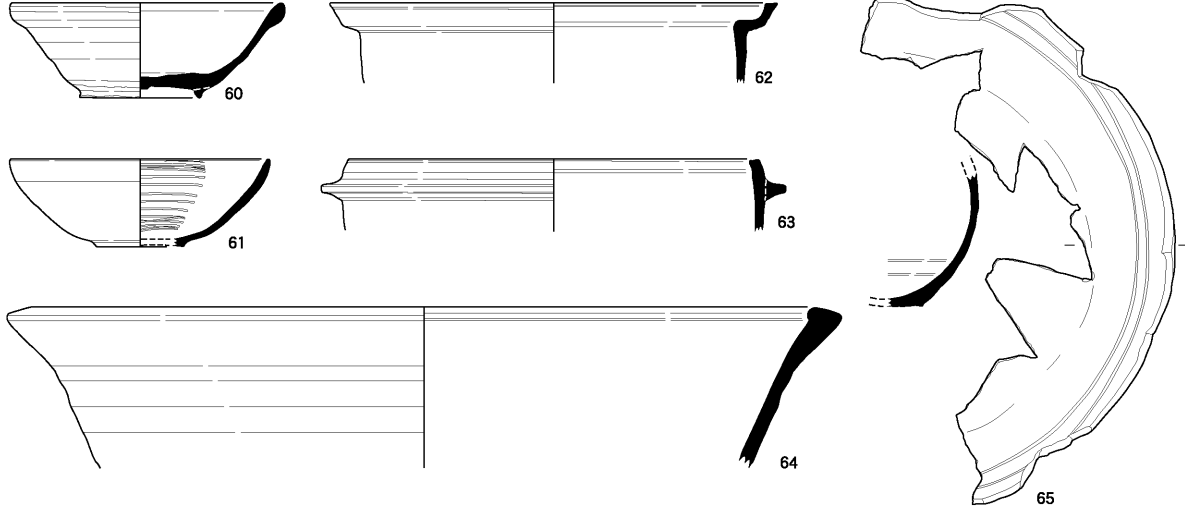
土壙62



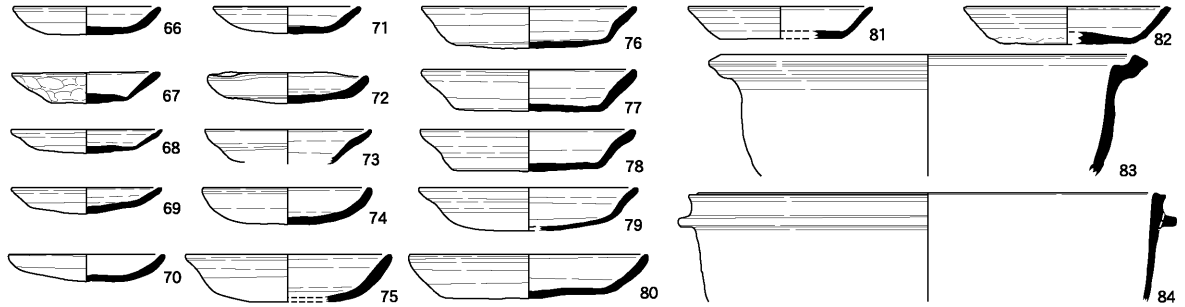
溝95



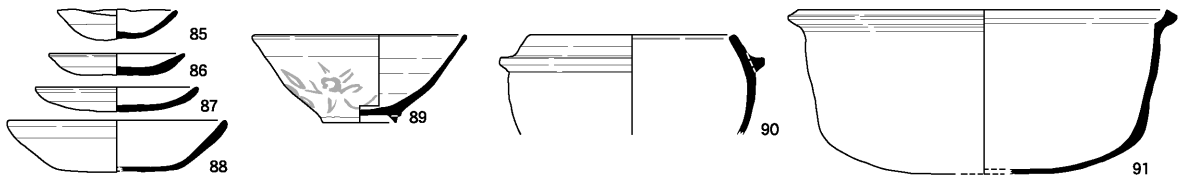
溝17



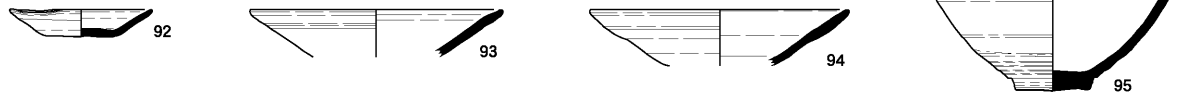
地業1



土壙13



土壙60



石組溝1

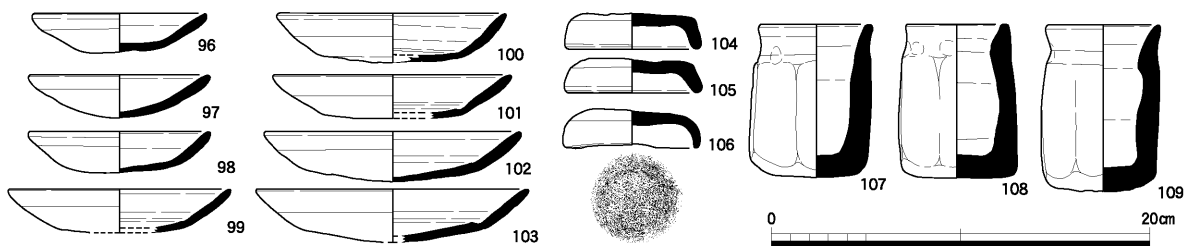


図32 平安時代・中世・江戸時代初期の土器実測図(1:4)

り部に×の篋記号がある。(54)は輸入白磁椀高台部で、胎土はやや粗い。

溝95出土土器(図32-55~59) 2トレンチ北区溝95から土師器皿の完形が出土した。鎌倉時代に入ってからのものである。

溝17出土土器(図32-60~65) 1トレンチ溝17から中世の遺物を検出している。(60)は山茶椀。(61)は樟葉産瓦器椀。(62)は瓦器鍋。(63)は瓦器羽釜。(64)は瓦質火鉢である。(65)は輸入黄釉二彩陶器盤である。平面形はやや楕円で、胎土は荒く淡黄で端部を欠いている。裏面に釉は掛かっておらず褐色である。

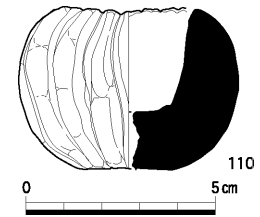


図33 建物基壇1出土土製品実測図(1:2)

掘込地業1出土土器(図32-66~84) 2トレンチ北区の地業上面から一括の土師器皿を検出している(66~80)。これらの土師器は 期に分類でき、14世紀後半から15世紀初めの年代観を示している。相国寺創建時の遺構である可能性がある。また地業下層から口禿の輸入白磁皿(81~82)、瓦器鍋(83)・羽釜(84)などを検出している。

土壇13出土土器(図32-85~91) 3トレンチ土壇13から土師器皿(85~88)・山茶椀(89)・小型の瓦質羽釜(90)・瓦質の鍋(91)などが出土しており一括資料となる。山茶椀外面に墨書があるが判読できない。

土壇60出土土器(図32-92~95) 建物基壇1の上限を確定する3トレンチ土壇60から出土した遺物である。15世紀末~16世紀初頭(期新~ 期古)と考えられる土師器皿(92~94)と大窩時代の瀬戸美濃系天目茶椀(95)を検出している。天目茶椀高台は削り出し高台である。

石組溝1出土土器(図32-96~109) 3トレンチ御用水(石組溝1)下層上面で検出した。いずれも完形品が多い。土師器皿には大きく分類して大小あり、小型には内面の圈線がない(96~103)。大型の約半数の土師器皿には灯明皿として使用された煤の痕跡が残る。焼塩壺(104~109)は寸胴型で胴部を軽い面取りで調整しており断面形が7角形である。焼塩壺には蓋がつき、蓋内面には不鮮明であるが型造りの際に用いた細かい布目の痕跡が窺える。土師器皿・焼塩壺の時期はすべて江戸時代初期に収まり、土師器皿の編年から 期中段階に分類できる。焼塩壺は泉州産であると考えられる。

建物基壇1出土土製品(図33-110) 3トレンチ建物基壇1の石組上に被さっていた焼土から検出された素焼きのカボチャ型の土製品である。用途・器種等は不明であるが、棒の先に取り付けたものか容器かであろう。器表凹部に微かではあるがキラコが残存している。伏見人形等の系列であれば江戸時代後半以降のものである。

(2) 瓦埴類(図34・35、図版12)

飛鳥時代丸瓦(図34-111・112) 竪穴85・196から丸瓦を検出した。(112)は3トレンチ竪穴196の竈内から検出した丸瓦広端部で、焼成は硬質で橙灰色である。広端面に篋切り痕が残る。面取りは凸面広端際に幅約3cmの横方向の篋ケズリ、側端際に1~3cmの縦方向の篋ケズリを施し、凹面側端際にも0.5~1.0cmの面取りを施している。凹面には広端面際まで約1mmメッシュの

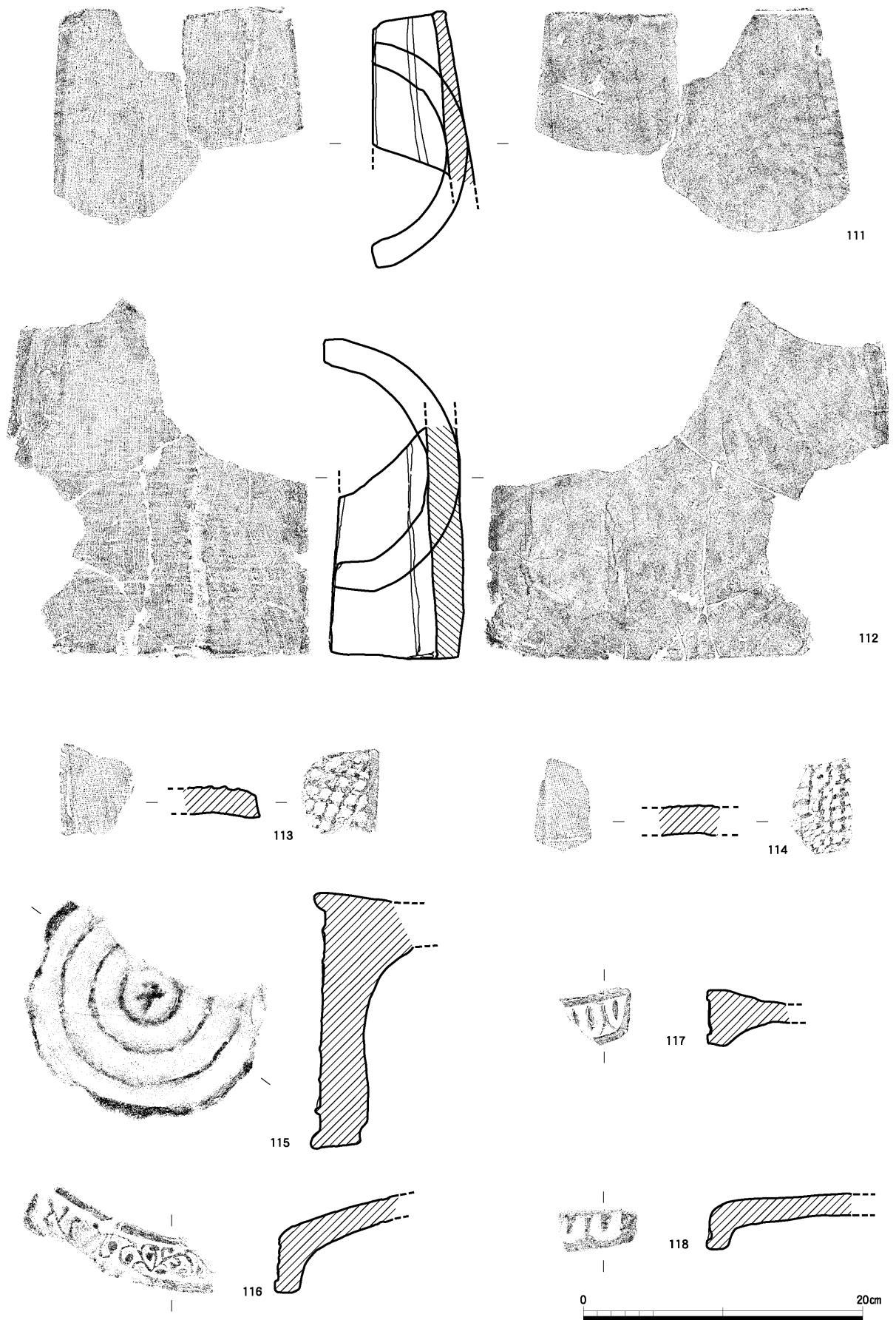


図34 相国寺創建以前の瓦拓影・実測図（1：4）

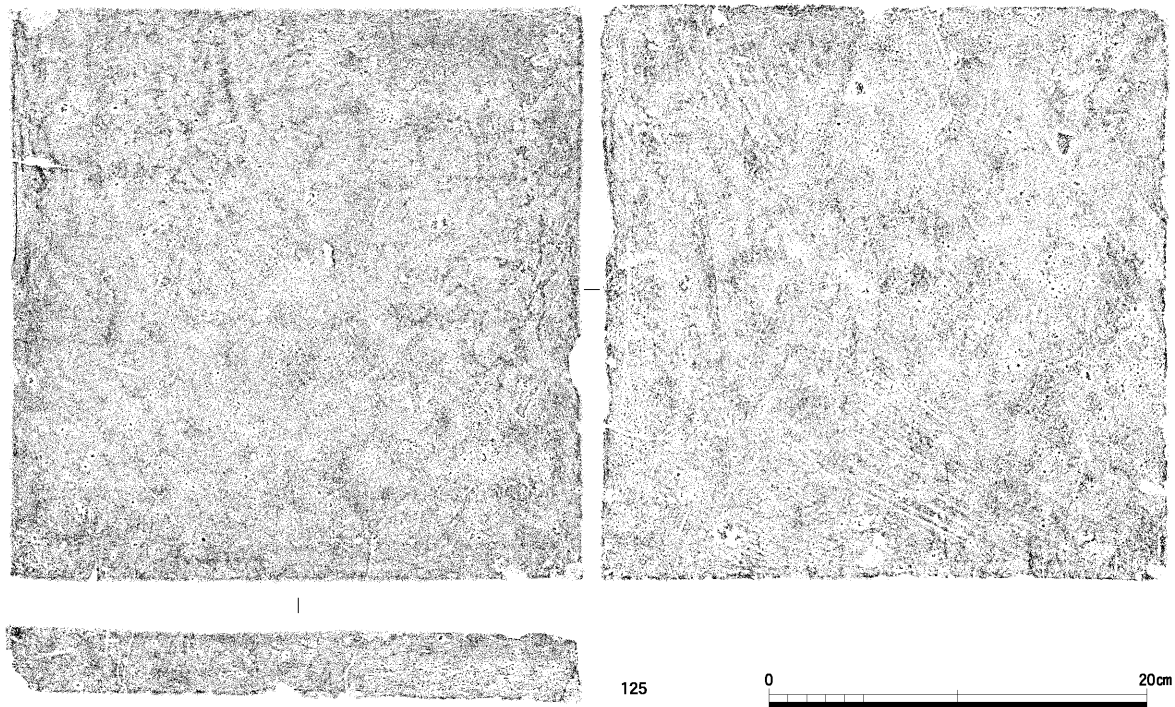
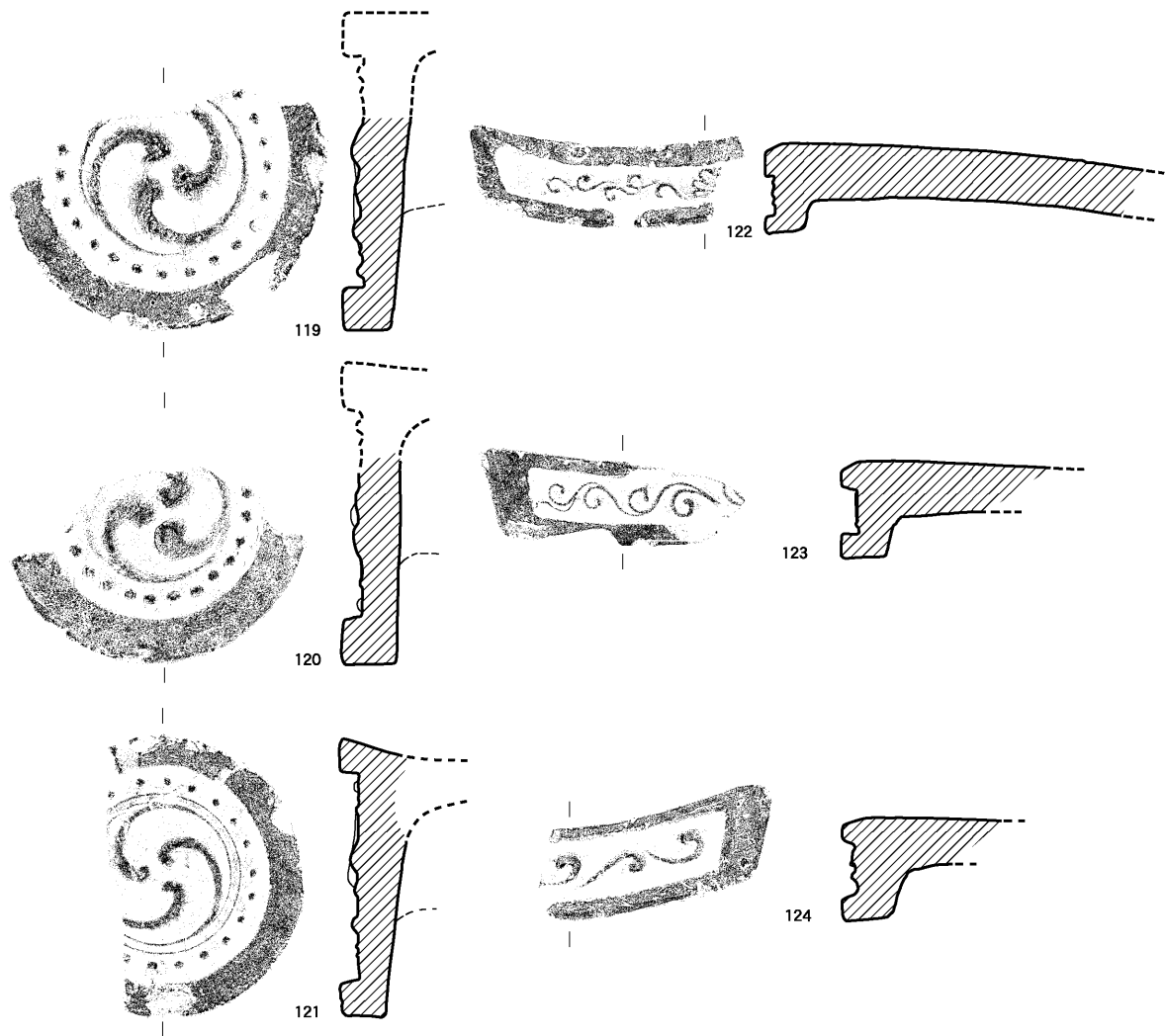


図35 相国寺創建以降の瓦・埴拓影・実測図（1：4）

布目跡が残り、縦方向に幅約5mmの布の継ぎ合わせ痕が食い込んでいます。(111)は2トレンチ南区竪穴85から出土した丸瓦狭端部である。狭端面は未調整で砂が付着し端部がすこしへしゃげており、凸面狭端際に面取りの痕跡がない他は(112)とほぼ同様の調整である。狭端部に玉縁がないことから、行基葺き瓦であると考えられる。(111)と(112)は胴部が欠けているため接合しないが、凹面の布の継ぎ合わせ痕が同一箇所に見られることから同一個体の可能性もある。

飛鳥時代平瓦(34-113・114) 3トレンチ掘立柱建物2の柱穴埋土から出土した。両瓦とも凹面に布目、凸面に菱形の斜格子目叩きの痕跡が残る。(113)の側端面は縦方向の篋切り痕、側端部凹凸両面に縦方向の幅約1cmのケズリ調整がある。焼成は硬質で(113)は橙色、(114)は橙灰色を呈している。竪穴住居出土の丸瓦とセットになる可能性がある。

後期難波宮軒丸瓦(34-115) 2トレンチ南区土壙62底から瓦当面向上にして検出した。3重の重圈文中心に逆さ右の陽刻がある。難波宮6015式に分類される。胎土は緻密で褐灰色。焼成は軟質である。器表は炭素が吸着して黒色を呈していた。

平安時代後期軒平瓦(34-116・117) 2トレンチ北区第2面より出土した。(116)は折り曲げ式唐草文軒平瓦で山城産。凹面広端まで布目、平瓦部凸面に縄叩きの痕跡が残る。胎土は粗く、焼成も軟質である。(117)は包み込み式剣頭文軒平瓦で播磨産である。焼成は硬く須恵質である。

鎌倉時代軒平瓦(34-118) 山城産折り曲げ式剣頭文軒平瓦である。2トレンチ北区第2面より出土した。焼成は軟質で表面に炭素が吸着している。平瓦部凸面に縄叩きの痕跡はない。

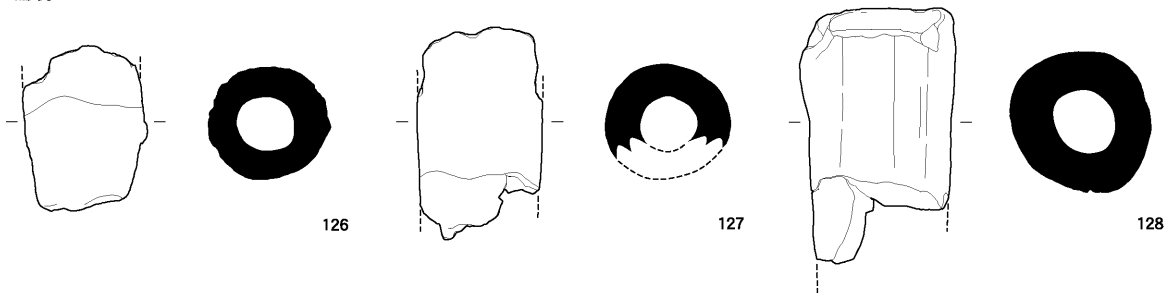
相国寺創建以降の瓦・塼(35-119~125) 相国寺創建以降の瓦・塼類のほとんどは火災によって焼けて変色しており、二次搬入によるものである。(119~121)は三巴文軒丸瓦で、(119)が2トレンチ南区瓦溜32から、(120・121)が2トレンチ南区瓦積暗渠49から出土した。(121)の三巴文は巴の巻き方向が(119・120)と逆で、巴文が細く圈線が二重に廻る。(122)は相国寺創建期と考えられる半裁菊花唐草文軒平瓦で、凹面広端部に面取りを施した瓦当貼り付け式段頸である。瓦当面に離れ砂が付着し、凹面は横ナデが施され布目が見られない。同系列の軒平瓦が相国寺境内・鹿苑寺境内・臨川寺境内などから出土しているが、周縁と唐草文脇との間が空いており、同范瓦は報告されていない。2トレンチ南区瓦溜32から出土した。(123・124)も2トレンチ南区瓦溜32から出土した唐草文軒平瓦であるが、(123)の凹面には布目が残る。(124)には瓦当面に離れ砂の痕跡がなく、相対的に新しい瓦であると考えられる。以上の(119~124)は(122)を除いて年代を確定することは難しい。

また禅宗寺院を特徴付ける完形の塼(125)が2トレンチ南区瓦積暗渠49から出土している。裏面に糸切りの痕跡が残るが、焼成が甘く器表が荒れているため、その他の調整は不明である。

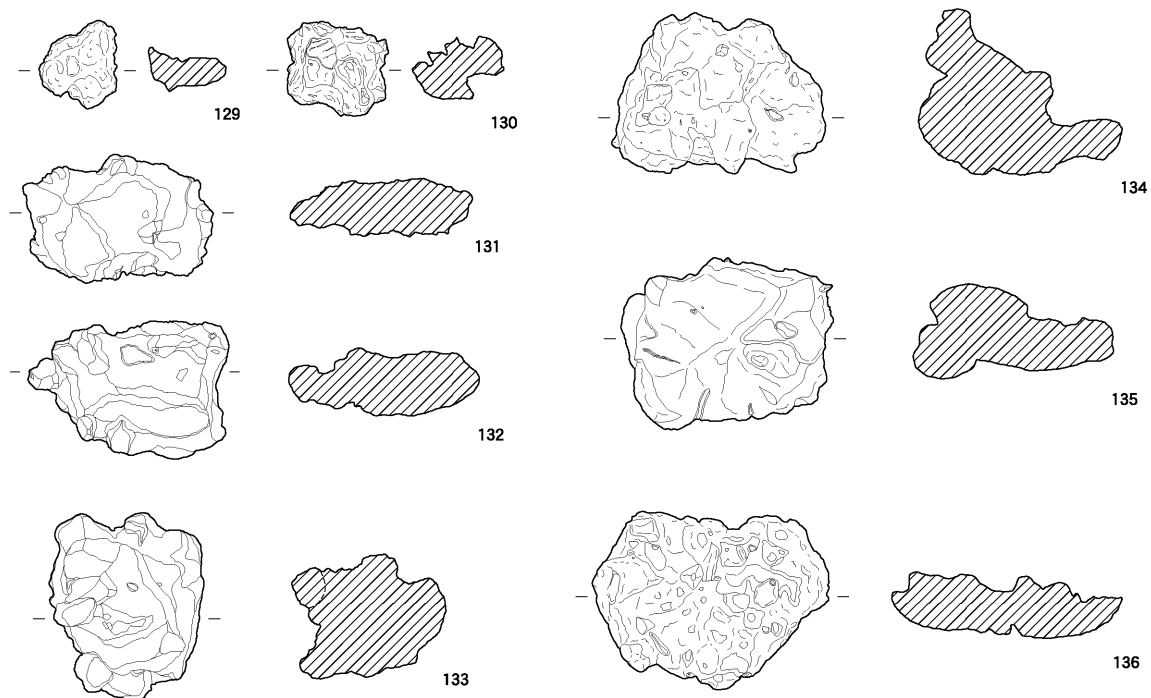
(3) 製鉄関連遺物(図36、図版13)

鞆羽口(図36-126~128) 3トレンチ竪穴189と土壙280から鞆の羽口を3個体分検出した。何れの羽口も長石などの砂粒を含み胎土が荒い。幅は7cm前後で、内径が約3cmである。羽口の長さは完全に復元できる個体はないが、20cm内外であると考えられる。竪穴189からは竪穴の隅

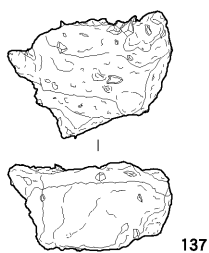
鑊羽口



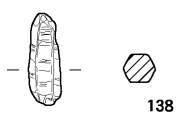
鉄滓



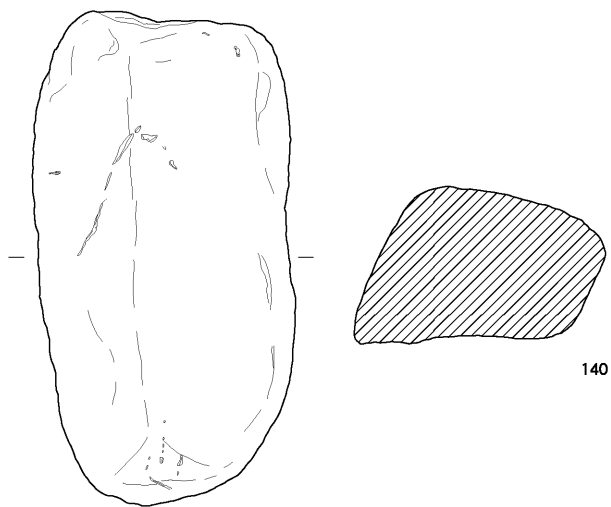
炉壁



水晶



支柱石



砥石

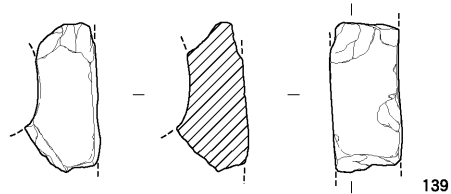


図36 竪穴住居群・土壙280出土製鉄関連遺物・石製品実測図(1:4)

に2個体分が鉄滓と一緒にまとめて置かれてあった(127・128)。丸く収めた先端部分が残存している(126・127)は、鉄鑄造に伴うガラス質・鉄錆・土が先端部分に付着していた。(126)の付着部分をX線で撮影したところ鉄成分の残存が明らかとなった。



図37 竪穴196出土砥石

鉄滓(図36 - 129 ~ 136) 表2にまとめたように、竪穴住居群の内、12棟の床面から不定型の鉄滓を多数検出した。特に3トレンチ竪穴300からは鉄滓と鞆の羽口を南隅の床上に集めた状態で検出しており、また3トレンチ竪穴196・302の竈内からも鉄滓を検出している。竪穴住居から出土した鉄滓の総個体数は93個で、総重量は2,955gである。また3トレンチ土壌280(131 ~ 136)から出土した鉄滓の検出量は51個体・総重量5,800gで、竪穴住居群から検出した総重量よりも多い。鉄滓の破片も10cm前後のものも多く、炉底に溜まった痕跡と考えられる湾曲したものもあり、竪穴住居内から検出した3cm内外の鉄滓(129・130)よりも大きい。鉄滓には磁石に弱く反応するものもあり、X線撮影で確認した全ての鉄滓に鉄成分が残存していることが判明した。奈良文化財研究所の村上隆氏に鉄滓の化学分析をお願いし、小鍛冶段階の鑄造が行われていた可能性が高くなった(付章参照)。

炉壁(図34 - 137) 3トレンチ竪穴189から60g、3トレンチ竪穴218から310gの炉壁と考える小片を検出している。竪穴218から出土した幅5cmの炉壁片側には、鉄滓が厚さ1.5cmほどこびり付いている(137)。壁本体は赤く焼け締まっており長石などの大粒の砂が多く混入している。竪穴189の炉壁は原形を留めていない。

(4) 石製品(図36・37)

水晶(図36 - 138) 3トレンチ竪穴277から六角形の白化した水晶を検出しているが、使用目的などは不明である。

砥石(図36・37 - 139) 3トレンチ竪穴196から小型の砥石が出土している。研ぎ面は3面あるが、特に1面だけが極端に凹んでいる。この砥石は鉄生産に関連する可能性がある。

支柱石(図36 - 140) 2トレンチ南区竪穴85竈に据え付けてあった支柱石である。長さ25cmの方形で上面が物を据えやすいように平らになっている。砂岩の自然石で全体が赤く焼けている。

(5) その他の遺物(図38 ~ 40)

鉛ガラス数珠(図38 - 141) 直径11mmの空色をしたガラス製数珠玉1個が2トレンチ北区掘込地業1から出土した。重量は1.92g、比重3.49で、蛍光X線で鉛が検出されたことにより鉛ガラスであることが判明した。現時点では国産か輸入かは不明である。地業は14世紀後

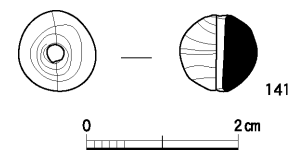


図38 鉛ガラス数珠
実測図(1:1)

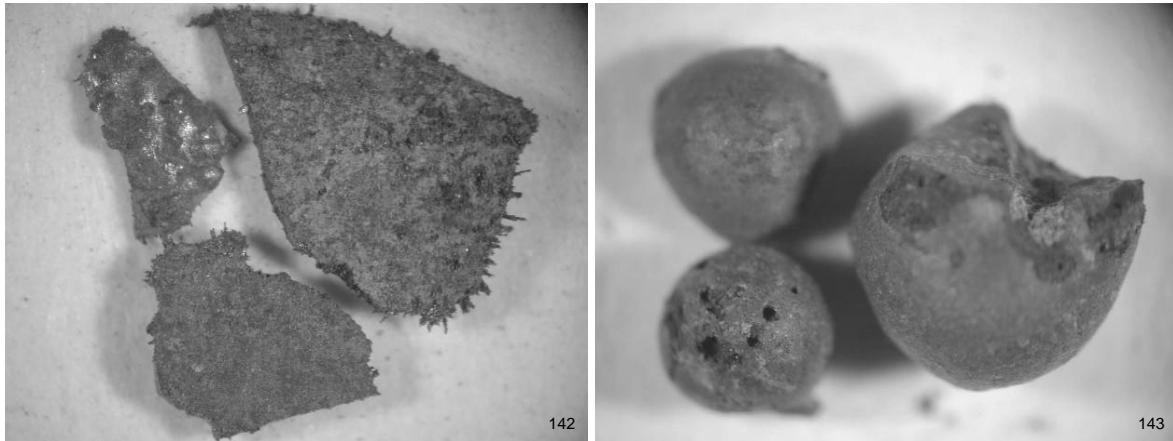


図39 鍛造剥片と粒状滓

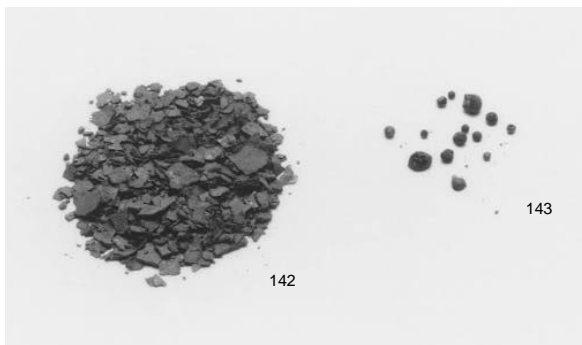


図40 鍛造剥片と粒状滓

半と考えるが、遺物が飛鳥時代から中世のものまで含んでおり、中世を遡る可能性もある。化学分析をくらしき作陽大学の北野信彦氏にお願いした。

鍛造剥片・粒状滓（図39・40 - 142・143）
 竪穴内で鉄を鍛造していた可能性が考えられたので、床に作業台のような花崗岩を据え付けてあった3トレンチ竪穴302の床土をコンテナ1

箱分持ち帰り、サンプル土を水で洗浄後乾燥させ0.5mm・1mm・2mm・4mmの4種類の篩で選別し、磁石を当ててみたところ、多角形の形状で光沢のある銀灰色を呈する長さ1mm以下～5.5mm、厚さ0.05～0.35mmの鉄剥片が磁石に多量吸着した（142）。この鉄細片は砂鉄ではなく剥片であることから鍛造に伴うものと考えられる。また1～2.5mmほどの玉状になっている多孔質で黒灰色を呈した粒状滓（143）なども採取できた。²⁾

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 2) 選別方法については、成東町教育委員会『成東町真行寺廃寺跡発掘調査報告・鍛冶工房址の調査』1985年 によった。

5.まとめ

今回の調査で明らかになったことを年代順に述べる。

竪穴住居群は出土遺物から7世紀半ばから後半までに収まり、藤原京遷都（694）前後に廃絶した可能性が高い。多くの竪穴住居内から鉄滓と鍛造剥片を検出したことは、竪穴を工房として使

用していた可能性がある。また韃の羽口・鉄滓・炉壁が出土していることから、近辺に鑄造施設が存在したことは確実であろう。

調査地から200m北西に位置する上御霊神社から出雲寺跡とされる出土瓦が藤原宮・本薬師寺系の軒瓦セットであることや、竪穴住居の存続期間を考え合わせると出雲寺造営と時期的に一致し、竪穴住居群を形成していた集団が出雲寺造営に関わっていた可能性がある。

竪穴住居廃絶後に成立した掘立柱建物2は、柱穴埋土より出土した遺物から8世紀初頭以降に建てられていた。7世紀後半から8世紀初頭に何らかの画期があったことは確かであるが竪穴住居と掘立柱建物との時期差以外は不明である。

今回の調査では掘立柱建物2以外に確実な8世紀代の遺構・遺物を検出していない。この点に関しては近隣の調査で検出していないことと同様である。

平安京造営後の状況についても近隣の調査同様に遺構に伴うものではないが9世紀後半代の緑釉陶器を検出していることから、その時期には貴族層による開発がこの近辺に及んでいたことを想定させる。また平安時代末期から鎌倉時代にかけての溝の検出は、この地域が再開発され都市化していく過程を示すものである。第3面で検出した多くの柱穴も、おそらくこの時代から成立したものとする。

第2面では中世の遺構・遺物が多いが、創建時の相国寺に関わる確実な遺構を検出できなかった。2トレンチ北区で検出した掘込地業1を相国寺に係するものと捉えれば、創建期の遺構である可能性が高い。また3トレンチで検出した掘立柱建物1と掘込地業1との関係は不明である。

相国寺の再興期である桃山時代の遺構として確実に遡れるのは、劫外軒に伴うと考えられる基壇1である。『塔頭敷地図』によれば、劫外軒は東西幅「二十一間四尺」(約42m)とあり、2トレンチ南区西端で検出した南北溝・溝2から御用水までの距離に符合する。しかし劫外軒に関しては明治に入って廃絶しているので劫外軒寺域内の建物配置等の史料を欠いている。今回の調査でも天明大火焼出範囲や東西幅・建物基壇等が判明しただけで塔頭建物配置の復元・特定まで至らなかった事は残念である。

3トレンチで検出した御用水に関しては、寛永四年(1627)から七年にかけて後水尾上皇の仙洞御所が徳川家光によって造営されており、寛永十一年(1634)から十三年にかけて小堀遠州を奉行として園池が造られているので、この時点までには池水確保の点からだけでも確実に貫通していたはずで、御用水跡下層上面で検出した遺物の年代観とも矛盾しない。しかし、劫外軒の区画を御用水が兼ねていたことや、江戸時代初期の遺物の検出面下に厚いシルト系堆積層が存在したこと等を考え合わせると、御用水開削がさらに遡る可能性がある。

以上見てきたように調査地には平安京造営以前の縄文時代から今日に至るまで盛衰を繰り返しながらも連続と歴史が積み重ねられ、遺構・遺物が多量に残存していることが判明した。今回の調査で解決できなかった問題も多く、課題となった。今回検出した遺跡の広がりを確定する必要と共に、今後の調査に期待したい。

6 . 付章 鉄滓の化学分析について

村上 隆（奈良文化財研究所）

相国寺境内から竪穴住居跡に伴って多数の鉄滓や、フィゴの羽口などが出土し、7世紀中頃から後半にかけてこの地で鉄を作っていた証しとして注目される。今回、これらの中から、竪穴85、竪穴189、土壌280から出土した3点を選んで分析した。は少々粘性を持った鉄滓の破片、は、いわゆる錠形滓と称されるものに分類され、かなり重量のあるものである。

それぞれの資料からサンプリングした試料の断面状態観察の結果、いずれの資料もほぼ同様の組織が観察された。代表として、竪穴85から出土した鉄滓の断面観察結果を示す（図41 - 左）。組織は、(a) 約30 μm 程度の金属粒、(b) 明確な凝固組織であるデンドライト組織、(c) デンドライト組織を取り巻く針状組織、(d) 針状組織の間隙を埋める組織、の4相に概ね分かれる。

X線分析（EDS）並びにEPMAカラーマッピングの成果（図41 - 右）を総合した結果、4相はそれぞれ (a) ほぼ純鉄に近いフェライト系の鉄粒子、(b) ウスタイト (FeO)、(c) ファヤライト (Fe_2SiO_4)、(d) ガラス質の基質組織、と同定できた。

金属を鉱石から抽出する工程の基本は、【採鉱 選鉱】〔製錬 精錬〕と展開する。今回分析に供した鉄滓の始原材料が、砂鉄か鉄鉱石のどちらかを結論づけるためにはさらに検討を要するが、分析で得た成果から、上に示した工程の後半部分、〔製錬 精錬〕の中間段階で排出された鉄滓と判断してよいと考えられる。いずれにせよ、7世紀後半の鉄生産の実態を、分析によって明らかにできた意義は大きい。なお、現場からは、鍛造剥片なども検出されており、これらを含めた詳細な検討に対しては、改めて報告の機会を持ちたい。

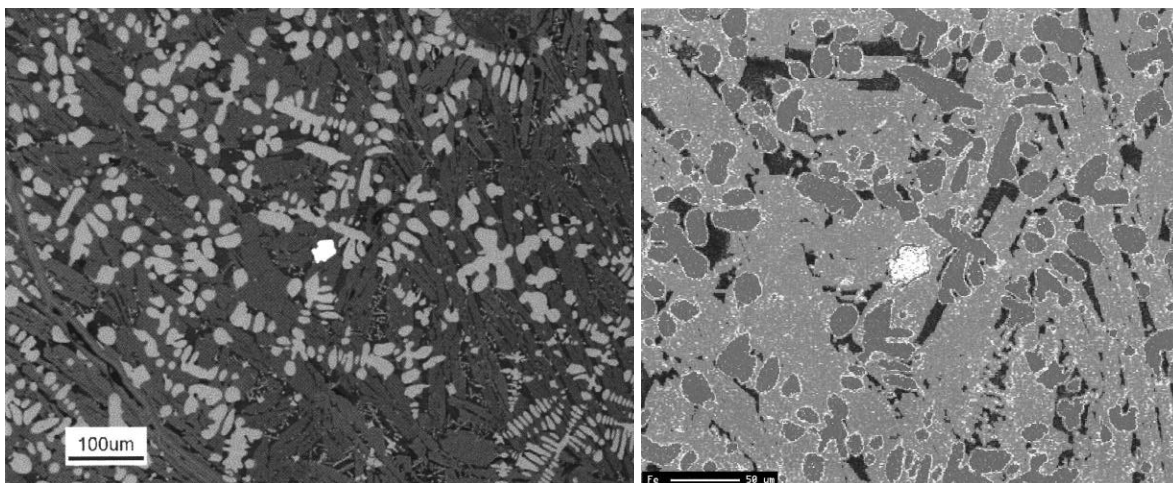


図41 竪穴85床面出土鉄滓（左：光学顕微鏡写真、右：EPMAカラーマッピング分析）

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	しょうこくじきゅうけいだい							
書名	相国寺旧境内							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2004-14							
編著者名	東 洋一、能芝 妙子							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しょうこくじきゅうけいだい 相国寺旧境内	きょうとしかみぎょうく 京都市上京区 いまでがわどおりからすま 今出川通烏丸 ひがしいるしょうこくじ 東入相国寺 もんぜんちょう 門前町701	26100		35度 01分 49秒	135度 45分 58秒	2004年6月 21日～2004 年11月30日	約1,100m ²	美術館 増設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
相国寺旧境内	寺院跡	飛鳥時代	竪穴住居、掘立柱 建物、柵列	弥生土器、土師器、須 恵器、鉄滓、鞆羽口、 瓦	7世紀後半の竪穴 住居群を検出			
		平安時代	土壇、溝、整地層	緑釉土器、土師器、白 磁				
		鎌倉時代	溝、柱穴	土師器、瓦器、須恵器、 輸入磁器、瓦				
		室町時代	掘込地業、掘立柱 建物、柵列、土壇、 柱穴	土師器、瀬戸、輸入陶 磁器、瓦器、須恵器、 瓦				
	桃山時代 ～江戸時代	建物基壇、瓦拵、 瓦積暗渠、築地、 布掘柵列、竈、石 詰遺構、土壇	土師器、磁器、焼締陶 器、施釉陶器、輸入磁 器、瓦	劫外軒基壇跡、禁 裏御用水と土塁を 検出				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-14

相 国 寺 旧 境 内

発行日 2005年3月31日

編 集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発 行

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961